
二人はリリカル

モーリリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人はリリカル

【Nコード】

N90220

【作者名】

モーリリン

【あらすじ】

転生した人のリリカルな話。この話には転生・TS・逆行が含まれておりますのでご注意ください。この作品は「Arcadia」様にも掲載されております。

プロローグ（前書き）

ご都合主義満載です。不定期です。

プロローグ

一台のスクールバスが停まり二人の女の子が乗ってきた

二人とも栗色の髪をし、双子なのだろうか並んで見ると、瓜二つであつた

「あ、こつちこつち！」

手を振る金髪の少女、その隣の紫色の髪をした女の子は微笑みながら二人を迎えた

「おはよー、アリサ、すずか」

「おはよう！アリサちゃん、すずかちゃん」

「おはよう！なのは、このか！」

「おはよう、なのはちゃん、このかちゃん」

なのは、このかと呼ばれた二人は一方は元気よくもう一方はだれながら二人が座っていた空いてるスペースに座って行く

「まったく、アンタはいつも元気が無いわねー」

「これが私にとっては精一杯なの、アリサ」

「あんたは・・・はあ、いやもう慣れたわ」

頂垂れる金髪の少女 アリサ・バニングス は溜め息をついた

「溜め息なんかしちゃって、幸せが逃げて行くぞ、アリサ」

「アンタねー！」

「まあまあ、アリサちゃん落ち着いて」

紫色の髪をした少女 月村すずか は

苦笑しながらアリサを宥めるが、アリサは静まらず

つい先ほどまで話していた方と違うもう一方の女の子に
顔を寄せて

「姉として、妹がこんなので大丈夫だと思う！？」

「にははは・・・大丈夫・・・かな？」

「なぜ疑問形なのだ姉よ、そこは言い切って欲しかった」

「そりゃ疑問形にもなるわよ！」

「あはは・・・」

いつも通りの光景、いつも通りの日常

和気藹々と四人は私立聖祥大付属小学校に到着するまで

微笑ましい光景を周囲に垂れ流していた

「いつ見ても二人のお弁当美味しそうだね」

「ほんとほんと、実際においしいしね」

昼休み、屋上のベンチでお弁当を食べながら二人の
弁当の中身を見て感嘆する

「まあ、我が母の料理のレベルはその辺のコックには優っているよ
思っ」

当然だ、とばかりに受け答えをし、いただきますと合掌して弁当を食べていくが

一人は何か考えているのか、弁当を開けっ放しのままだ

「どうしたの姉さん？悩み事？」

「ほんと、さつきからぼくとしちゃってどうしたのよ？」

二人に指摘されてようやく気付いたのかハツとなって開けっ放しになっていた弁当から箸を取り出し「いただきます」と言っておかずを口にほおりこんだ

「ほんとどうしたの？」

アリスが心配して覗き込むが、ぱっと顔をあげて

「にははは、違うよ将来についてちょっと・・・」

「ああ、今日の社会の授業の事ね。でも、そんなに悩むことなの？」

「まあ、姉さんは真面目だしね」

「あんたは不真面目過ぎるのよ！」

ふと箸が止まり真剣な顔で問いかけた。

「みんなは、もう決まっているんでしょ？」

「そうねえ、私は両親の後を継ぐことになるかな」

「私は、機会いじりが好きだから工学分野の専門職に就きたいかな？」

「私は翠屋を継ぎたいかな？料理とかお菓子とか作るのも食べるのも好きだしね」

問われた三人はすらすらと将来のビジョンを答えていく

その際に弁当をつつく手は止まっていな

「すごいね皆は、私はまだ決められないんだ」

にやはは・・・と苦笑した

「まだまだ先があるんだから、これから見つければいいじゃない？」

「そうそう、ゆっくりと探していけばいいと思うよ？」

無難な回答にそうだよねと答えて食事を再開する

そういえばさ・・・だよね〜臭いよね・・・あははは・・・

悩みが少し軽くなったのかその後の会話に華が咲いた

「まだ・・・か・・・」

その呟きは春の風に紛れて消えていった

さて、皆さんは「死後の世界」がどんなものかご存じだろうか？

極楽浄土？天国？地獄？宗教によって色々答えが、人によっても

答えが違つてであろう。それはそうだが、「死後の世界」なんてものは
想像上の世界でしかない。そもそも「そろそろいいかの？」・・・

どうやら現実逃避を

終わらせなければならぬらしい

「あ〜・・・ひとつ聞いていいでしょうか？」

「なんじゃ？」

「俺はなぜここにいるのでしょうか？それとあなたは誰でしょうか？いや、自分が死んだのはわかりますが・・・」

「そこまでわかっていいるなら何も気にすることは無い、後ワシは神じゃ」

「・・・聞きたいことは山ほどあるがそれは置いておくことにしよう

おっと自己紹介が遅れた俺の名前は だ。わからない？まあいいじゃないか

それほど重要じゃないしね。趣味はまあ典型的なオタクだった。最近は2次創作を漁っていたり

ネットゲームをしたりと興味が沸いたら手を出す節操のないオタクだ。

家族は両親と姉と弟がいてそれなりに仲は良かった

二十歳にもなって就職が決まり、来年から新入社員として頑張ろうとした矢先に

交通事故。まあこどもが渡っている時にトラックが突っ込んできたんだ

普段ならたぶん何もしなかったと思うが寝る前に読んだfateの二次創作

エミヤシロウの生き様に感化されたのかな、気付いたら飛び出して

最後に見た光景は赤い景色と命の鼓動を腕に抱いていたのを感じたのが最後だったな

こどもが死なずに済んでよかったのと、まだ両親に恩返して無いな

「・・・つまりここは死後の世界でしょうか？じじ・・・カミサマ」

「左様・・・と言いたいところじゃが、少し違う。ここは生と死の

狭間じゃ、あと何言おうとしたんじゃ？」

「いえ、なんでもありませんよカミサマ……って狭間？」

そう言われて、周りを見るが……一面真っ白で今立ってるのかどうかすらわからない状態だ

「発音が気になるがまあよいじゃろう。そうじゃ、簡単に言つとまだお主は生き残れる可能性がある」

ふむ……一種の臨死体験か？いや、だがあの自分の大事な何かが出ていく感覚は
確実に死ぬであろうと直感したし……この展開は……読めたぞ！

「なるほど、遂に俺がオリ主になってハーレムを築いていく物語が始まるわけだな」

「まあそれも選択肢の一つじゃ」

「選択肢？」

「そうじゃ、本来ならお主はあの時飛び出さずにこどもが轢かれる所を見るはずじゃった

じゃが、お主は飛び出してしまった……運命に逆らう力を見させてもらったわい」

笑顔で頷くカミサマ。というより周りが真っ白でさらに服も真っ白なので頭と手が浮いてるように見える。さっきから気持ち悪い

「じゃから、お主には三つの道を授けよう。一つはさっき言った異世界への転生

その際、特典をつけさせてもらうが……まあその説明はあとじゃ。

二つ目はこのまま

目覚めさせて残りの余生を生きてもらおう、その際にも特典を用意する。三つ目は・・・

そのまま魂を浄化し何も継承せず転生するかじゃ。この場合は英雄レベルの能力、現代だと

確実に歴史の教科書に載るほどの能力を付けさせる」

「その特典の説明はいつしてくれるのですか？」

「異世界への転生か、目覚めるかのどちらかを選択したら説明しよう」

ふむ・・・特典の説明は気になるが・・・三つ目ほど便利な能力じゃないのは確かだが

三つ目は俺という意識がなくなると思うしな・・・ということだ三つ目は却下

残る二つだが・・・この世に未練があるとしたら両親に恩返ししていないのと、まだチエリー

なのが唯一の心残りだな・・・特に交友関係も無かったし

「一つ目の異世界転生をお願いします」

「本当にそれでよいかのね？」

「はい」

「わかった、ではt」その前に一つよろしいでしょうか？「なんじや？」

異世界大いに結構、だが

「自分で生きたい世界を決めれるのでしょうか？」

ここ重要だ、Hx や忍者イッパイ！な世界へ行ってしまったら即

死亡フラグが建ってしまう

それは非常に歓迎しがたい・・・何としてもこれだけは！

「それを踏まえて特典の説明をしようとしたのじゃが・・・せつかちよのう」

「う・・・すみませんでした」

ここは素直に頭を下げておこう。というか改めて思うとやっぱり俺ってせつかちなんだなあ

生前も言われてきたけど、直さないとな

「まあよいじゃろう、特典についてじゃがお主のカルマポイントの中で決めてもらおう」

「カルマポイントとは？」

「カルマポイントとは生前にしてきた業をポイント化したものじゃ。簡単に言うと善行悪行の

数々を数値化し、ポイントとして加算減算させる。もちろん善行をしたらプラス、悪行をしたらマイナスじゃ」

なるほど、俺の場合はゼロに近いだろうな・・・なんたって、ほとんど何もしてないし迷惑も極力

かけないようにしたからな、そんな俺がポイント多いわけが・・・

「ふむ、なかなか善行をしているようじゃな・・・ここまで生きてこれほどとは、若いもんも捨てたもんじゃないの」

フオフオフオと笑うが、あれ？何かしたっけ俺？何もやってないよ
うな気が・・・

「人間の尺度で測るでない。ワシの判断で振り分けておるのじゃ」

「あれ？声に出てました？」

「いや、顔に出てたわい」

顔にでてたか・・・まあいいや、しかし俺は何をやったんだ？
考えても仕方がないのだが気になる

「俺は何をして善行を重ねたのでしょうか？」

「ふむ、自覚しとらんのかね？お主毎回簡単なトラブルでも手を貸
しておったじゃないかね」

あゝまあそうなんだけど、何かほっとけないというか、見過ごせな
いというか

正義感じゃなくて、大変だなあと遠巻きに見るより早期解決するた
めに手を貸したほうが・・・

そう！自分の気分も良くなるし万々歳だっただけなんだ！

「いや、自己満足しただけだったんですけどね・・・」

「お主はそのような気持ちでも、向こうからすれば本当にありがた
いことじゃったんじゃ」

まあそう考えればいいか

「それで気になるポイントはどのくらいなのですか？」

「40じゃ」

「・・・多いのですか？少ないのですか？」

「20歳にしては多いほうじゃ。平均5くらいなもんじゃぞ」

多いな・・・生前の俺に拍手を送りたいぜ

「さて本題に入らせてもらうぞい、そのカルマポイントでこれから

様々な事を決めてもらう

が、その前に決められる項目を挙げていく手元のボードを見てみなさい」

ボードって言っても何にもないと思っただけどいつの間にか何かあるSF映画とかでよくある空中にディスプレイがあつてタッチできるやつ

それがパソコンの画面位の大きさを手元に浮いてる。すげえ」

「今からリストを挙げるから、その中から選ぶんじゃないぞ。時間は特に決まつておらんからゆつくり決めなされ」

うお！ いっぱい出てきた、へっ……才能も選べるんだ……つてまさか

「質問いいですか？」

「なんじゃ？」

「この中から才能を選んだとします。そうすれば当然選んだ才能は開花していくのでしょうか」

「選んだ才能以外はどんなに努力しても伸びないのでしょうか？」

「ふむ、結果から言つと答えは違う。本来持ち合わせている才能+選んだ才能

になるから安心して選びなされ」

「なるほど、ありがとうございます」

これでほつとした、それ以外の才能が無いなんて事になったら

ポイントがほとんど才能へ流れてしまうからなあ……よかつたよかつた

まずは世界を決めてそれに適した才能とかアイテムを選んでいこう。

ふむ、こんなものか。ずいぶん時間がかかってしまったが・・・
まあ一生を決めるものだしな。慎重にならざるを得ない
ちなみに40Pで決められたのはこんなもん

- ・世界はリリカルなのはの世界 5P
- ・才能は刀剣 槍 弓 戦術 魔法 料理 それぞれ1P
- ・能力はアーチャーのUBW 魔力(S) それぞれ5P
- ・スキルは直感(A)千里眼(A) それぞれ4P
- ・アイテム宝具は剥離剣エア 10P

こんなもんか、リリなの世界は危険だが・・・一度でいいから空を
自由に飛んでみたいんだ！

決して原作キャラといちやいちゃとか、そんなん全然考えてないか
らな！ほんとだぞ！

こほん、ステータスはfateのサーヴァントが印象に残りすぎて
こうなっちまったが

後悔はしていない。最後までなでば、にこぼで悩んで時間をとった
わけじゃない。

・・・厨二病全開だな・・・いや、もし戦争地域に生まれたら目も
あてられん

案外これでちょうどいいかもしれない。

つと、ここで詳しく説明するとまず才能についてだが一流の領域ま
で踏み込めるレベル

と認識してくれ。アーチャーのUBWで投影・解析・強化・変化の
オプション付き、いうなればアーチャーの魔術そのものだ

魔力(S)はリリカルなのは基準。なので「元の値+魔力(S)」
になる

つまり魔力Sランクは約束されたわけだ。スキルはf a t eから取ってきたもので、直感はまあ野生の本能。ランクAまで行くと未来予知に近いらしい。千里眼は視力の良さ
遠方の敵の捕捉、動体視力の良さだ。つまり見える！見えるぞ！状態になれるわけだ。
最後に宝具だがエクスカリバーと迷ったけど、UBWあるし大丈夫だろうと思いきいつにしたわけだ。
魔力もこれだけあれば一発は撃てるだろう。しかし、なぜ同じ宝具扱いのUBWが能力にあるんだ・・・？

「決まりました」

「おお、ではボードの右下の赤いボタンを押してくれないかの」

む、おお・・・気付かなかった。こいつを押せばいいのか・・・ぽちっとな

「・・・うむ、なるほどの。あいわかったこれで決定じや」

「ありがとうございます」

「よいよい・・・さてそろそろ転生させるのじゃが、何か言いたいこと聞きたいことはあるかね？」

うむ・・・あるな

「本来のカルマポイントの使い道は何だったのですか？」

「本来はプラスなら魂を浄化して転生をマイナスなら少々罰を与えて転生じや」

「浄化されるのに罰を与えて意味はあるのでしょうか？」

「フオフオ・・・魂に刻み込まれた恐怖は簡単には拭えないのじや

「よ」

なるほど・・・肝に銘じておこう

「他にはないかの？」

「もし、ポイントを使わず転生をしその世界で生きて死んだ場合はどうなるのですか？」

「その場合は、引き継いで死んだときに精算しプラスだったらそのまま転生とまあ他の人より罰を受けにくいという事じゃな」

ふむふむ・・・もし使い切らなかった場合でも使い切らなかった分罰を受けにくいのか・・・？まあいいか
等価交換なのか・・・？

「他にはどうじゃ？」

「あゝ最後に言いたいことがあります。少し大きな声になりますがいいでしょうか？」

「うむ、構わん」

これは外せない、感謝の気持ちを込めて

「父さん！母さん！それと周りの人たち！今までありがとうございます！
ました！」

ふゝすつきりした

「ありがとうございます。では、よろしく願います」

「うむ、少しびっくりしたが大切な事じゃな。お主の武運を祈る」

そういつと、目の前が光で覆われて意識が朦朧としてきた
そういえば宝具ってどうやって出すんだろう・・・と最後に思った。

プロローグ（後書き）

ほのぼの行きたいなあ。

幼年期

意識が戻ると知らない天井が一面に広がっていた

ふと視線を横にずらすと女性の顔が視界いっぱい広がっていて

「うああ！」

そう、びっくりした。

しまった！第一声を間違えてしまった！

「あらおはよう、私の大事な赤ちゃん」

「あー」

「あらあら・・・上手なお返事でちゅね」

なんだろう・・・馬鹿にされてないんだけど・・・
これ何のプレイ？みたいな感覚が体中を駆け巡る感じだ

「お、なのはは起きたか」

なのは？・・・まあTSオツケーだしリリカルな世界でも
なのは何て名前はありふ・・・え・・・？

「初めまして今日から君のお父さんになった

高町 士郎 だ、よろしくな

そして、今日から君は 高町 なのは だ」

・・・・・・高い高いしながら言う、お父さんになった

体格ががちりしている男・・・ええええええええええええ！

「おぎやあああああああ！」

「うお！きゅ、急にどうしたんだ？」

「土郎さんが怖いんですよ、きつと」

ままま・・・まじかよ！！そりや確かにリリなのでお空飛んで影から原作キャラをこっそり見守れる立場になれたらなあとは思ってたし

TSも別にいやじゃないよ！美形多いしね！この世界は！！

だけど、え？何？高町なのは！？あの管理局の白い悪魔！？将来の魔王様！？

いやいやいや無理無理無理！カミサマ何してくれんの？原作チートがさらにチートを

付加して生まれ落ちちゃいましたよ！

「おぎやあー！おぎやあー！」

「あらあら、土郎さんのせいでこのかも起きちゃったじゃない」

「む、俺のせいn・・・すみませんでした」

「おぎやあ！・・・あ？」

「うふふふ・・・二人とも元気が良くてよかったわ」

一瞬すごく黒いオーラがでた我が母・・・高町 桃子

たぶん、寝てるときに自己紹介をしたのだろう・・・その前に

このか？誰だそいつあ・・・真のオリ主か？

いや、転生ではないな何故かって？未だ赤ちゃんらしく泣いている所が

何よりの証拠だ！！いや、違つかもしれないけど・・・

「うむ、姉のこのかのほうが元気だな・・・妹のなのはは元気よ

く泣いたが

今は大人しいしな」

「ふふ・・・もう個性が出ててうれしいわ」

なるほどな。俺が妹というわけか・・・というか個性なのか？

というより、女という事実が確定したわけだが、そこまで嫌悪感や混乱が無いな

まあ、2次創作でTSいいなあ・・・とか思ってたりで一種の憧れをもっていたからな

男の喜びを感じれなくなっただが、まあ問題はない・・・問題無いもん！

「おぎやあ！おぎやあ！」

「よしよし、いい子だから泣きやんでね？」

「おぎやあ・・・すー・・・すー・・・」

何というテクニク・・・これが母の実力か

現在父に抱かれているが、なんだ、ごつごつして居心地が悪いまあそれも後ちよつとの辛抱だ

なんてつたつてあんな美人のおっぱおを貪れるんだから・・・
まてよ・・・オムツの中に排泄しないといけないのか

うあ、想像したら気持ち悪いな、そして俺のすべてを見られるわけか・・・

あゝ、こんなだったらなのはの兄に生まれて禁断フラグ立てたか
つたぜ

「ん、どうした？眠くなってきたのか？」

うん、何か考えてたら眠くなって来たよ・・・

「ふふふ・・・かわいい寝顔、早く大きくなってね。おやすみ」

・ ・ ・

あれから3年経ちすっかり両足で立って走り回れるように健康に育った

1年以上も羞恥プレイとおっぱいを貪って十分に堪能したし

言葉も2歳位からまだ拙いがしっかりと「話せる」ように滑舌も良くなった

カミサマからもらった能力の検証はあまりやっていないが、魔法の才能のおかげなのか

魔力を自身の中から感じられそれのある程度制御できるようにもなった

魔法や投影はまだ試して無いが、解析はできた。本能か魂かわからないが

それレベルにやり方が刷り込まれているのか、すぐに行くことができた

これは、能力として選んだからなのか？まあ使いこなすには相応の努力が必要だろう

そして、しっかりと自分の魔力が消費されるのも確認したし、

デバイスがあれば非殺傷設定で投影を行えるかもしれないというチ

ートな事実も浮上して

最近は気分がいい

スキルも視力が見ようと思えば2キロ位も見渡せるし、自身に危険が迫ったら第6感というのか

それが働いて危険を自然と回避できたのでスキルもすっかりと機能していることに安心した

その際に父士郎の目が光ったのは気のせいだ

そしてやはりというか、俺たち二人の上に姉と兄が存在していてそれぞれ名前が

高町 美由希 高町 恭也 という。

朝早くに道場へ行ってくるなどの会話からなにか運動を確実にやっており

3歳になる前に幼稚な声で

「きょうやにはあさどこにいつてるの？わたしもつれていってよ
」

と、上目使いで迫ったところ渋っていたが父が

「まあ連れて行ってやりなさい恭也、見るだけなら大丈夫だろうし
後で俺も行くから」

とフォローを入れてくれて美由希姉と手をつないで歩いて行った
道場に入り早速鍛錬を行う姉と兄。その手には小太刀位の木刀が二本
これで確定した、俺はリリカルなのはの主人公高町 なのはという
ポジションで生まれてきたことが
原作でのなのはは運動音痴だったがそれは膨大な魔力のせいだと推
測する

最初立つ時は何故か苦戦したものだが、膨大な魔力が垂れ流しにな
っているせいか？と思い

立つ前に魔力を制御して立とうとしたらあっさり立てたのが根拠だ
以来、暇な時は魔力制御で時間を潰している

そして、魔力制御のおかげで運動音痴は最低でも回避できそうなので鍛錬を見て父に

「わたしも、きょうやにいやみゆきねえみたいなけんがほしい！」

親バカなのか、1週間位経った時の道場で

「ほーら、なのは。プレゼントだ！」

あっさり自分に合った小太刀型木刀を二個入手できた
その際にこのかはいいいのかと尋ねてみたが、

「このかは別のプレゼントをあげたから大丈夫だよ」

と笑顔で答えてくれたので納得して、見よう見まねで
その日から小太刀をぶんぶん振り回していた。因みに姉このかは着
せ替え人形を貰っていた。

この時期は翠屋が開店し始めらしく、毎日忙しそうだ
特に母は料理やお菓子の研究に余念がなく夜になるとぐっすり眠る
ほど疲れている

父もSP仕事の合間に翠屋関連での事情で忙しそうだ、だが毎朝の
鍛錬を欠かさないのは流石というべきか恭也兄は高校受験のため勉
学と鍛錬とお手伝いと非常に忙しそうだ、

美由希姉は手伝えることはしっかり手伝っていて俺たち二人以外は
皆大変そうだが、自分にできることは無いか？と思っただが・・・

所詮は三歳児、何もできないしやろうとしてもかえって迷惑をかけ

てしまうので、このか姉と大人しく二人で遊んでいるがこのか姉はやはり寂しいのか、たまに泣いてしまうことがあるからこっちも大変だこんな状態で原作なのは一人でいたのか・・・確かに誰にも迷惑をかけないようにする性格になるのも頷ける。俺もこんな生活が前世であつたらそうなるかと確信できる

早く体を動かして体力をつけたい俺にとって、御神流の鍛錬は是非ともやってみたいが、どうやって切り出そうかと思って考えながらこのか姉の相手をしていたら

美由希姉が遊んでる最中に混じって来た、やはりまだ小学生だし、手伝うことも限られているのか

観察しているとしょっちゅう手持無沙汰になっている姿を目撃していたので

そこで、思いついたのが美由希姉に見てもらえればオツケーじゃね？

「みゆきねえ」

「ん、どうしたの？」

さて、どう切り出そうか・・・

「みゆきねえといっしょにわたしもからだをうごかしたいの」

どうだ！上目使い+首を傾げるコンボ！

「ん、私も教えられてる立場だからなあ・・・」

「そこをなんとか！」

「まあ相談してみたらいいかな？」

「ありがとうみゆきねえ！！」

急に抱きつかれて慌てているがその隙に胸の感触を確かめる
ふむ・・・最近の小学生は発育がいい。

「あゝ！わたしも！」

「きゃ！こゝ、このかまで！？」

く！このおっぱいは俺のものだぞ！このかあ！

「いやあ・・・そゝ、っこはあ・・・ふあ！」

その後父士郎が来て収集がついたけど顔が真っ赤になって熱い吐息を零している美由希姉は色っぽかった。次の日から、基本トレーニングだけ参加の許可が降りたのだった。

幼年期（後書き）

誤字、脱字等ありましたら指摘をお願いします。

変化（前書き）

シリアス度高いです。

変化

俺は大事なことを忘れていた

そう、我が父が大怪我をする時期になってしまっていた

勿論転生当初は覚えていたが5年という歳月は記憶を色褪せたものにするには

十分すぎる時間であった。

父が大怪我をしたという一報があつたのは夜の鍛錬を終えてシャワーを浴び夕食を食べ終わってある程度した時間だった
その日は父が帰って来ず父抜きでの夕食であった

父が居ないのは何回かあつたことだったので特に遅く帰るのに何ら疑問を抱かなかつた。

pllll... pllll...

リビングでお茶を飲みながらくつろいでいた時に一本の電話が鳴った
俺は自分が近いのもあって、ソファから立ち、こんな時間になんだ？
と、思いながら受話器を取った

「もしもし、高町です」

「もしもし高町さんでいらっしやいますか？こちら 病院の鈴木
というものですがお母さんいらっしやいますか？」

何か病気患っていたっけ？何て思いながら

「母さん！何か病院から電話が掛ってきて母さんに代わって欲しいだっけ」

「はい、今行きますね」

ぱたぱたとスリッパを鳴らして近づいてきて、受話器を俺から受け取る

そのままリビングでくつろぐと思った時に何か落とした音がリビングに響き渡った

すぐに、タクシーで病院に行った。

受話器を落とした後、俯いたまま茫然としている母

そこで思い出してしまった、父が大怪我をするという事を

すぐさま受話器を拾い、現状を聞き出しすぐに駆けつけるといふ旨を伝えて

電話を切り、母を気つけるのも兼ねて恭也兄と美由希姉を大声で呼んだ。

何事だとすぐ駆けつけ俺の口から父が大怪我をしていて危険な状態

だという知らせを受けた

と伝えた、やはり母は強い、すぐに気を取り直しタクシーを手配し家族総出で行った

漸く翠屋の指針が決まって軌道に乗りそうな時にこの知らせは、俺たち一家いや、母にとって残酷な事だったと思う。

手術室の前で祈るように知らせを待つ

こんなドラマや映画のシーンでよくある場面

そう、良くあることなんだが当事者になった俺は不安で不安で仕方なかった

これはアニメの世界じゃない、最初からわかっていた。

わかっていたつもりだった、けど人が生き死にの境

ましてや自分の父である人がそうなっていることを目の前にすると全然わかっていなかった事を思い知らされる。

何が才能！何が魔法！他人に与えられた力の上で胡坐をかき

順風満帆な人生を送れる、この世の中がストーリー通りに動く
そう思っていた自分を殴りたい！一声かけることだってできた
忘れないようにメモを取ることだってできたはずだ

そんなことを永遠と考えていると

手術中のランプが消え、一人の医師が出てきた。母がすぐに顔を上げ

「土郎さんは！？土郎さんは大丈夫なんですか！？」

不安だったのだろう、怖かったのだろう、俺たち子どもの目の前で
あんなに取り乱したことは、一度も無かった。

「手術は・・・成功です。本当によく頑張ってくれましたよ」

そう言われた瞬間、皆の表情から影が消えた

運ばれてくる父、それを取り囲むようにされど医師たちの邪魔をしないように

皆、無事に還って来た父を見て安堵の息を吐いた。

繋がれたチューブ、点滴、青い顔の父

だが、布越しから確りとわかる位胸を上下に動かして生きている

5歳児が何もしてやれないことは分かっていた

だが、それでもごめんなさいと心の中で呟かないと気が済まなかった

・
・
・

父が入院しさらに忙しくなった翠屋

それに追われて母はよく頑張っている、いや、頑張りすぎている程だ
毎日翠屋へ行き深夜寝静まったころに帰ってくる。翠屋で泊まって
いくこともざらだ。

恭也兄はより一層手伝いと少しでも家計を潤そうとアルバイトも始
めたらしい

なんのアルバイトかわからないけど帰ってくるときはいつも疲れて
いる

美由希姉は中学生になり翠屋のウエイトレスや父に付きつきりでも同様帰りが遅くなる時もある

皆がドタバタしている時何もできないのが歯がゆい

このか姉も幼いながらもそんな気持ちに駆られているのか

家族に迷惑をかけないように自分でできることは自分でしっかりしている

たまにフォローを入れてやるけど5歳児に見えないほど周りが確り見えている

ただ、見ていて何だか無理をしているようにみえる

当り前か、まだ母さん父さんと遊びたいと思っっている時期だ目に見える範囲でフォローは確りとやっているのだが・・・

「お母さんまだ帰って来ないのかな？」

俺と遊んでいる最中に必ず呟く言葉

これにこどもながらどれだけの思いが詰まっているのだろう

俺には想像もつかない、だから俺はこのか姉の気を紛らわせようといつも必死だ

「今日も夜遅くなるのかもしれないよ」

「今日もかぁ・・・はぁ・・・」

俺はどうすればいいんだ

しばらくして父の意識が戻った

心配掛けたなとまだ少し青い顔だけど笑顔でそういった

医師もしばらく入院生活とりハビリをしなきゃいけないでしょうが

それさえ乗り越えれば退院ですよ、と嬉しい事実を教えてください

これで元の鞘に戻ったと思った。だが・・・

「お母さんお母さん、ここ行きたい!」

このか姉がテレビ画面に指をさして言った

そこに映っていたのは遊園地で定番の観覧車であった

わりと近いらしく行けなくもない所だった

「このか、お母さんまだお仕事の休みができないの。だからそこへは連れて行けないのよ・・・ごめんね」

「ええ〜!嫌だよ!行きたい行きたい!」

父の意識が戻ってようやく元通りと思ったのか

久しぶりに我が儘を發揮したが、が、当然連れて行けるはずもなく

ダダをこねるこのかに困っていると

「このか、母さんは連れて行けないと言っている、それにまだ父さんも入院中だ

我が儘言うんじゃない！」

恭也兄が強めにこのか姉に注意をした

いつもならここで引き下がるはずだった

やはりストレスを感じていたのだろう

「いつもそれじゃない！私はちゃんといい子にしてたよ！なんで皆と遊べないの!？」

「いつもいつもなのとはしか遊べない！なんで!?!どうして!?!お母さんなんで私と遊んでくれないの!?!なんで私はいつも一人ぼつちなのだ!?!」

34

やはりストレスを感じていたのかとうとう爆発してしまった

俺みたいに割り切れないし、俺たちは保育園にも通っていない、公園では俺と一緒に

遊ぶだけ、つまりどうやって発散させればいいのかわからなかった

どこにぶつけていいのかわからなかった、これは当然の結果であった

「姉さん……」

俺はそんなこのか姉を見ていられず、力いっぱい抱きしめてあげることしかできなかった

腕の中で暴れるが鍛えていたんだ、そんじょそこらのこどもには力

負けしない自信がある
暴れて、喚いて、それを数十分位繰り返し疲れたのか泣きながら寝てしまった

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・私は姉さんを寝かせてくるから」

何も言い返せなかった三人は黙って私達を見送った

このか姉を部屋のベットまで運んで行き寝かせ、俺は下へと降りて行った

リビングには暗い顔をした3人が待っていた

「・・・・・・・・ごめん「謝らないで」・・・」

「母さん、恭也兄、美由希姉・・・忙しいのは分かっていたよ。母さんなんか夜遅くまで

記帳作業や研究やマーケティング、色々やることあって大変なのはわかってるよ

恭也兄もアルバイトをして家計を助けてくれるし、美由希姉もウエイトレスや父さんの

お見舞いで大変そうだよね」

一区切りを入れ三人の顔を見渡す

皆申し訳なさそうな表情をしている

「でも、ほんの少しでもいいから姉さんのために時間を作れなかつた？

一緒にお風呂に入るだけでも、一緒に寝るだけでも違つたはずだよ？」

そう、このか姉が寂しそうな顔をしているのは皆わかつていたはずだがそれ以上に「周りの事」のほうに気がなりそこにしか目がいか
なかつたのだろう

「でも、それ以上に許せないのは私・・・いつも一緒にいたのにいつも遊んでたのに、いつも私じゃなくて家族を見ていたそれが悔しい。私じゃ姉さんの気持ちを救えなかつた・・・」

「それは違つぞ、な」 「違わない」

「違わないよ・・・皆に一声かけるだけで違つてたはず、私は気づいてた・・・のに・・・」

不甲斐ない気持ちでいっぱい埋め尽くされた俺は
自責の念に駆られて泣いてしまった

父の事もこのか姉の事も、自分は・・・無力だ。

転生時に力が確約されていた、だが、無力だつた
使いこなせているこなせて無い以前の問題だ

心が弱かつた、意志が弱かつた・・・こんなんじゃ・・・意味がない

ふわっと、誰かに抱きしめられた

「なのは・・・自分を責めないで・・・誰だって失敗はあるわよ？それに、なのはだけじゃなくて私たちもどこかでなのはに任せておけば

大丈夫だと思っていた私たちこそ責められないといけないのよ？だから、泣かないで・・・なのは」

「う・・・うあああああああ！」

何も考えられなかった
ただただ泣きたかった

誰かのぬくもりを感じたかった

漸く泣きやんだが、疲れたのかすーすーと寝息を立てている

普段何かと気にかけて5歳児に見えないほど大人びているなのはは今、母さんの腕の中で眠っている

「・・・この子には、無理をかけすぎちゃったみたいね・・・」

そう呟く母さんは悔んでいるのかいつもの元気が無い

が、俺も同じだ・・・生まれた当初からどこで知ったのかわからない事や

俺でも知らない事を知っている。俺がやっていた受験勉強の内容を指摘された時どこの天才児だ、と思ったものだ。

2歳からしつかりとした言葉で喋れるようになったり、3歳前の時から体を動かす事に興味を覚えたのか、俺たちの御神の剣の修行を見るようになり、父さんが上げた小太刀を振り回していたりその日から俺たちの真似をするようになった。俺はこどもの事だすぐに飽きるだろうと思っていたが
一向に飽きず、荒いながらもちゃんと型どおりに剣を振っているのを見た時は正直その才能に嫉妬した

「ああ・・・なのは俺達より大人びていてすっかり忘れていたが、まだ5歳なんだよな・・・」

だが、まだ5歳なんだ。大人びていても俺より頭が良くてもまだ・・・まだこどもなんだ

「くそ！」

自分を殴りたくなってくる
アルバイトをして少しでも家計を助けようと
母さんの負担を少しでも減らそうとしていた
でも、俺には見えていなかった・・・末っ子達の苦悩が、悲しみが

「私がしつかりしていれば・・・」

そんな呟きが聞こえてきた

見ると美由希が顔を青くしながら震えていた

「いや、美由希だけじゃない・・・俺もだ・・・」

「でも！私が一番年が近かったんだし、一番手が空いてたのに！」

「美由希・・・」

何も言えなかった、悔しさが伝わってきた

その日は鍛錬をせず自責の念に駆られたまま眠った

「ん・・・ふあ・・・」

朝か・・・って昨日偉そうなこと言って泣いてそのまま寝ちゃったんだっけ

隣にはこのか姉がすーすー眠っている、現在朝の5時半、鍛錬に行く時間だ

起こさないようにそ〜っとベットから抜け出して顔を洗いにいく

洗い終わりお風呂場で着替えて朝のランニングに行こうとした時
恭也兄と美由希姉がいた

「あ・・・」

「お、おはよう。恭也兄美由希姉」

「お・・・おはよう。なのは」

「ああ、おはよう。なのは」

微妙に気まずい空気が流れた
が、朝一番にそんな空気は気分的に頂けないので

「いや、昨日はごめんね？あんな偉そうなこと言っちゃって」

たはくと頭を掻きながら言ったが
何か二人ともすごく暗い・・・まあしょうがないっちゃしょうがないんだが・・・

「私はもう気にしてないよ？ただ、姉さんの事は気にかけておいてね？」

俺は大丈夫アピール。喧嘩というわけじゃないしそこまで引きずらないだろうと思っただけ

「このかもそうだけど、なのはの事も心配だよ？」

「ああ、あまり無理をするなよ?」

逆に心配されちゃいましたよ。まあ俺も発散していたら結構溜まっていたらしくわんわん泣いちゃったけど

「ありがとうございます。さてと、今日も一日頑張りますかね」

それがスタート合図になったのか俺達三人は玄関からランニングコースへ駆け出して行った

ランニングが終わり、朝の鍛錬（俺はまだまだなので基本の別メニュー）をし

朝ごはんの時間帯になる前に俺は先に上がりシャワーを浴びた

「おはよう、なのは」

「あ・・・おはよう母さん!」

いつもの笑顔に戻っているがどこか疲れた様子
昨日の事結構こたえてるんだなあと思いつながら
このか姉を起こしに階段を上って行った

「姉さん朝だよ?起きて」

ゆさゆさと肩をつかみ揺らす
う、うん・・・とゆっくり意識が覚醒していつている

だが・・・

「JJJJH・・・JJJJH」

俺は叫ばずにはいらなかった。

変化（後書き）

誤字脱字等ありましたらご一報ください。

疑問

叫んだ後、母が私の部屋へ駆けつけ何があったの？と
問いかけたのだが・・・

「え！？お母さん！？」

うそ！？どうして？とわけわからん事を言ってる
記憶喪失か？と思ったが母さんの事を識別できるなら違つし
どつという事だと頭をひねっていると

「あの・・・ここは高町なのはの部屋ですか？」

昨日とは人が変わったように何故か敬語で周りを見渡しながら聞いて
くる

一瞬母の顔が歪んだけどすぐに戻って

「ええ、そうよ。私の事はわかるから・・・この子の事はわかる？」

そう言つてついつと前に出されたが

「え・・・？私！？じゃあ、私は・・・だれ？」

「このか、どうしたの？」

「こ・・・のか？それが、私の名前なの？」

・・・どういうことだ？

まず記憶喪失なのかもわからない、自分の名前を忘れて母の事を覚
えている

こんな事が起きるのか？それに、俺の事を私と呼んだ。

ということとは、自分の顔が俺に似ていることを知っていたということだ

「じゃ・・・じゃあ、その子の名前は・・・なのは？」

「そうよ、このか。まさか本当に記憶喪失なの？」

「姉さん、昨日の事を覚えてる？」

「昨日・・・？・・・う・・・うあああああ！」

急に頭を押さえ叫び出した

急展開過ぎて思考が追いつかない

大丈夫！？このか！？と急に叫び出した

このか姉を落ち着かせようと母がなだめようとしたが

「頭が・・・いたい・・・いたいよう・・・フェ・・・ちゃ・・・」

何か言いかけて気絶した

何がどうなっているのか全く分からず俺は呆然とするしかなかった

このか姉が寝て母と俺はリビングに降りて行った

丁度鍛錬を終えた二人が帰って来たのでこのことを報告すると

「記憶喪失！？なんで！？どうして!？」

「美由希姉落ち着いて、まだ記憶喪失と決まったわけじゃないよ

幸い母さんの事は覚えているし、私だけ忘れているのかもしれない」

「しかし、そんな一部分だけが抜ける記憶喪失何てありえるのか？」

「それは・・・」

正直ありえないと思った

俺自身信じられないし何が起こったか教えてほしいぐらいだ

「病院へ連れて行ったほうがいいのかしら？」

「確かに心配なのはわかる、けど今は静かに寝ているし起きたら記憶が戻るかもしれないよ？私は様子を見るほうがいいと思う」

「私は、すぐ病院へ行ったほうがいいと思うよ、昨日の事もそうだし不安定な状態のまま放置するのは危険だと思うよ」

美由希姉の言っていることは尤もだ

昨日の事でこのか姉は相当参っている

だが、何かその提案には後ろ髪を引かれる奇妙な感覚がある

「お母さんが見てるから二人は学校へ行ってらっしゃい」

どうするか考えているうちに母がそう提案してきた

「それじゃ、翠屋が・・・!？」

「今日はお休みにするわ」

「母さん!？」

「お願い・・・」

声を強めてお願いする母に

二人は渋々了承するしかなかった

二人が学校へと行き家には母と俺、そして眠っているこのか姉が残った

「母さん、私がこのか姉の事を見ているから翠屋」いいのよ・・・え？」

「確かに翠屋は軌道に乗ってきているわ、でも、家族を蔑ろにしてまで

繁盛させようとは思わないの」

ウインクしながら俺に言う

だが無断休業は流石にまずい

だから俺はランニングがてら翠屋へ赴き

店先に臨時休業の紙を張ろうと思った

そのことを伝えると私がやるからと言ったが
俺がそれを断り

「母さんは、今日はこのか姉の事を見てるんでしょ？
だったら任せてよ！」

少しでも楽をさせてあげたくて

俺は紙に諸事情により今日は臨時休業としますと
紙に書き翠屋へと走った

帰ってくるとカレー特有の良い匂いが漂ってきた

そういえば、朝ご飯食べてなかったなと思ひ母が居るであろうダイ
ニングキッチンへ行った

案の定母が鍋を掻きまわしている所だった

「あら、お帰り。ちゃんとただいまって言わなきゃだめでしょ？」

「ごめんなさい母さん………ただいま」

「ふふ……お帰り、なのは」

やはり母には敵わないなと実感し

大盛りに盛られてきたカレーを合掌し勢いよく食べた

「冷蔵庫の中身を見てメニューを決めたけど、カレーで良かった？」

「うん、流石母さん。食材で何を作るのかわかるなんて」

そう、昼は基本誰も家には居なくなる

必然的に俺かこのか姉が料理を作ることになるのだ

最初は母が作り置きしてくれていたが、大変そうだし

何よりカミサマから料理の才能を貰っている

いい練習になるし俺が作ると提案した

最初は危ないよとか、届かないでしょ？とか言われたが

生前の得意料理カレーライスを作って食べさせてみたら

渋々ながらも了承してくれた

以来、昼は基本俺が作っている。料理のバリエーションは料理本や母に教わったりして

生前の5倍は増えたと思う。料理を作るということは食材も買いに行かないとならない

よって、冷蔵庫には常に食材をストックさせているのだ

食事が終わり御馳走さまと合掌し食器を片づけようとした

母も同じ考えらしく食器を持って台所に来たが

「母さん私が食器を洗うから、母さんは姉さんの所へ行つてて」

でも・・・と言ってたが、母はこのか姉を見るために休んだんだし

母自体疲れが溜まっている。

遠慮はいらないよと食器を引っ手繰って専用の台に乗り食器を洗い始める

じゃあ、お願いねと言って階段を上って行った

俺も食器が片付いた後、このか姉の様子を見に行つたが

依然として寝ているだけだし母も私が見てるから大丈夫よと言ってきた

そして、言われて気付いたが最近はこのか姉と一緒に居るから魔法を全然
試して無いなと思ひ言葉に甘えて道場に行ってるよと伝言を残し、
道場へ行つた

「久しぶりに一人になったな・・・」

気付いたらそう溢していた

まあいつかと思ひ、気を取り直してまず何から試そうかなあと悩む
ミッドチルダ、ベルカ、この二つは試せない。術式を知らない
魔法の才能で想えば何かできるだろうと思つたが、祈祷型魔法は
インテリジェントデバイスが無いと想像を術式に変換してくれない
これは、以前試したしこの事実を思ひ出すのに時間がかつたのは
思ひ出したくもない

消去法で、まずは投影かなと思ひせつかくだからカッコいいものを
投影しよう
と思ひ立つた

トレース・オン

「投影開始」

スイッチを入れ思ひ描くは、アーチャーが使つていた黒白の夫婦剣

・・・ん？おかしい、間違つていないはずだ。

術のプロセスはキツチリとわかつているはずなんだが・・・
もう一度、さらにもう一度、やれどもやれども投影されず
いきなり宝具が悪いんだ！と思つて近くの木刀を解析し
投影してみたらあつさりできた

「投影は確か、固有結界の副産物だよな・・・つまり、UBWを展

開すれば
宝具があるかわかるはず・・・」

そう確信し、詠唱を開始するが、結界も張っていないのに大魔術何て使ったら管理局に捕捉されてしまうかもしれないと思いつぐにやめた。幸い固有結界が発動されなければ魔力は発現しないやめて良かったあと安堵して、そして宝具・乖離剣エアもこの分だと無理だな・・・と、投影に関してはあきらめた。

次に強化、木刀を投影し強化して近くの大きめな石目掛けて思いつき振り下ろした

ガキイ！

もはや木刀が出せる音じゃない、自分の持った力は簡単に凶器になることを

実感し、少し怖くなった

さらに変化では、さっき投影した物を矢に変えようとしたが何か、細くなってよわよわしさしか伝わらない

少し泣きたくなって来たのは秘密だ。でも、原作みたいに捻じめる様にイメージしたらちゃんとなって矢にできる

ことが発覚して泣きたい気持ちはすぐに吹っ飛んだ。

そのあと強化を掛けてどこまで動けるか試してみたり

千里眼の効果を強化でさらに見えるようになったり、意識的な切り替えが可能になったり

だが、ランクと効果に釣り合いが取れない・・・何故だ？しかし、考えても分かるはずもなく

結局、使いこなせて無いんだと、納得して夕方検証すればいいか

と思った

収穫は思いの外たくさんあって以外に有意義な時間を過ごせた

家に帰り、お昼ご飯

朝、母が作ったカレーを盛り食べていく

母は疲れていたのかこのか姉と一緒に眠っていた

起こすのも悪いし、そのまま二人の様子を見て昼休憩にしたわけだ

それからまた道場へ足を運んだ

曖昧な記憶の中、千里眼のスキルを思い出す

「確か・・・アーチャーがCで5キロ先ははっきりと見えてたはず・・・」

うる覚えながらようやく思い出す

梯子を使い屋根に上り意識的に遠くを見た

「んっ・・・うお!？」

ドン!と効果音が聞こえるくらいにはっきり見えた

具体的に言つと6キロ位先にあるビルのオフィスの何処かの部屋
窓側のPCの画面の文字が見える。

「すげー・・・」

調子に乗って、更に見えるだろうと意識を集中してみた

突然、世界がモノクロになり、世界が・・・止まった

いや、動いている・・・が、この違和感・・・

まるで、数秒先の未来が見えているかのように・・・

飛んでいる鳥の軌跡が手に取る様に分かる

「う！頭が……！！！」

能力を酷使しすぎたのか、原因ははっきりしないが
急に頭が痛くなった、まるで脳が拒絶しているような激痛だ
しばらくすると、頭痛が収まってきた

「どういうことだ？千里眼って遠くを見るためじゃないのか？」

そんな疑問を抱きつつ、まだまだ検証不足だなと思った
が、今日はもうあの頭痛に苛まれたくない
夜寝る前に推測して時間があるときにまた試そうと軽く考えた

夕方になりまた道場から帰ってシャワーをし、二階上がり二人の
様子を見る

「お帰り、なのは。お昼何もできなくてごめんね？」

「大丈夫だよ母さん。それに、母さんの寝顔も見れたしね」

にししし、と笑って返す

母もふふふ、と久しぶりに綺麗な笑顔を見せてくれた

「ん……」

そういつて、目をこすりながらもぞもぞと起きるこのか姉

「大丈夫？このか。どこか痛い所や、気持ち悪い所とか無い？」

「姉さん、大丈夫？」

ぼくつとこちらを見ていたが、何か思いだしたようで
はっとなり

「昨日はごめんなさい!」

と頭を下げてきた

やっぱり無理を言ったのを自覚していたのか
肩が震えている

「このか・・・お母さんもあなたに謝らなければいけないの・・・
ごめんね、このか・・・寂しい思いをさせてしまって・・・ごめん
ね・・・」

「お母さん・・・お母さん!お母さん!お母さん!お母さん!」

堰を切ったように泣き出すこのか姉
だが、どこか違和感を感じる・・・

懐かしんでるような・・・まあ今その考えは不粹か
それにこのか姉にとっては懐かしいじゃないか
このか姉が起きた、それでいいじゃないか

「姉さん私の事わかる?」

「うん!昨日はひどいこといってごめんね?なのは」

「いいよ、姉さん。私は大丈夫だから」

「でも・・・わたし・・・にゃ!?」

ピンとデコピンをして

「これでお相子だよ、姉さん」

少し、臭かったか?と

恥ずかしかつたけど一度やってみたかったんだと強制的に自分を納得させる

「ありがとう、なのは」

そういったこのか姉の顔はとても綺麗な笑顔だった

正体

起きたこのか姉は見間違えるように

大人しくなった、いや、我が儘を言わないようになった

そして、どこか余裕を感じる所作がある

ストレスを発散したおかげで余裕を持てるようになったか？

と思ったがどこか違う。まあ考えてもわからないからそれは頭の片隅に追いやった

起きた当初は恭也兄美由希姉に謝ったり

二人は逆に謝り返したりと日本人が陥る典型的な譲り合いになったのではないはストープ！といって止めさせた

「心配掛けてごめんなさい、でももう大丈夫だよ！なのはもいるしね」

夕食時笑顔でそういうこのか姉

無理している様子もなくこちらを向いてニコニコしている

信頼してくれるのはありがたいが何だか俺が年下になったみたいで変な気分

いや、事実妹なんですけどね

そうしていつも通りの風景が戻ってきた

変わったのはこのか姉が

「わたしも鍛錬したい」

と言ってきたのだ

正直信じられない、運動が嫌いなこのか姉はスポーツや体を動かす

遊びに

苦手意識があり、やらないことのほうが多かったからだ

そのこのか姉が恭也兄に言ってきたのは驚愕に値する

事実恭也兄も美由希姉もびっくりしているのが目取れる

だが、無碍にもするわけもいかず俺と一緒にランニングコースへと
繰り出した

まあ鍛えてなかったからだろう物の一キロでバテた

付き添いで家まで送り届けて、俺はランニングコースを走りだした

「じゃ、行ってくるね〜」

「行ってきます」

「お留守番頼んだわよ」

そんな言葉を残して皆家から出発した

二人つきりになり、今日の昼は何しようかと冷蔵庫を覗いてると

「なのは〜、わたし道場へ行ってくるね〜!」

そんなことを俺に伝えるこのか姉

いったい何しに行くんだ?と思いつつ

「今日のお昼はラーメンにしようと思ってるから早めに帰ってきて
ね」

と伝えて、わかった〜!と返事をしながら駈け出して行った

だが、よくよく考えると何の用事だろうと疑問に思い

お昼呼びに行くがてらこっそり見てみようと思った

ラーメンの湯を切り後はスープの中に入れてトッピングを入れるだけ

作ったのはトツピングだけなんだ、期待させてスマンと誰に向かって謝ってるんだ俺？と頭を傾げ計画を思い出してこっそり見に行った

「あれ？・・・いない？」

道場に付いて気配を殺しこっそり覗いてみたが誰もいない確かに道場へ行くと言っていたが・・・家から出て行った様子は無い、家の中にいるはずなんだが・・・ふと違和感を感じた、何か見落としているような・・・

トレース・オン

「解析開始」

違和感の正体を探ってみたなら庭先に小さな魔法・・・結界魔法が展開されていた

その中には目を閉じて集中するこのか姉認識障害魔法かと目を細め思索する。もちろん見つからないように気配を殺して様子を見る。

「リリカル・マジカル・・・」

何か詠唱している

確かこの呪文はなのはが最初のころまだ魔法を始めたばかりの時に詠唱していたパスワードだ・・・

「フライアーフィン！」

足からピンク色の翼が生える、いや翼の形をした魔法だふわっと地面から少し浮きあがり、そして着地した

瞬間、俺の思考が冷めていった。

俺はその場を後にし、少し経ってから「彼女」を呼びに行った。

「ご飯できたよ」

素知らぬ顔で道場へと歩いていく。

「っ！！はい！今行くねー！」

慌てているようだが

俺はようやく、あることに気づいてしまった。

今までの言動、記憶混乱の前の発言

そして、呪文の詠唱・・・最後の決め手はピンク色の魔力光

このか姉は逆行者、もしくは転生者だ・・・並行世界の 高町 なのはの・・・

彼女がこのか姉の正体だと推測した

だが、この事実は今は秘匿しておくことにした

これ以上の混乱は避けたいし、いきなり魔法少女ですと言っても誰も信じないだろう

何よりこの忙しい時期に余計な事に手間を掛けさせたくない

それに、「このか」が居なくなっただけという事を家族に伝えられるはずもない・・・。

ラーメンにトッピングを盛り付けてテーブルへ運ぶ

「今日は塩ラーメンだけど・・・バタートッピングする？」

「ん、わたしはそのままでもいいよ」

どこか機嫌が良い彼女

こっそりと解析してみると、魔力が制御されてなおかつ膨大な魔力を身に纏っていた

それが余計に拍車をかける。否定したい。いや、脳が、心が、拒絶している。

だが現実には、完全に魔力を身に纏って制御している。となるとやっぱり……

いや、記憶を持っているからこのか姉なのか？だが、魔法を使っている。

そしてピンク色の魔力光。だったらなのはなのか？

「なのはどうしたの？さっきから何か考え事？」

これは、心配しているのか？イモウトニカ？ソレトモタニンニカ？

ダレ？アナタハイツタイダレナンデスカ？

オレガシツテイルカノジョハイマドコニイルノデスカ？

「ネエサンハ……ドコニイルノ？」

「……え？」

現実を悟り、思わず零れた。

「別に……何でも無いよ？」

「本当に？」

「だからそういつてるでしょ!？」

「え?ど、どうしたの?急に?具あ」あなたには関係ない!」……
い……い」

現実を理解してしまった。

俺が知っている姉さんじゃない。

姉さんはもつと、おつちよこちよいで、もつとわがままで、一人に
なると寂しい顔をするけど

俺が居ると、それを我慢して笑いかけてくれる。そんな姉さんはど
こに行ったの？

「……わたし」その声で!その顔で!私に話しかけるな!」

俺は、現実を受け入れたくなく。食事をほおりだして、玄関へ駆け出した。

玄関をくぐり思う。

当初、俺が高町なのはでもあり、原作に介入をし原作通りにする予定だった

いくらこれが現実でストーリーとまったく同じに進まなくても巻き込まれることは必至だ

なので、少しでもアドバンテージを得ようと未来が予知しやすいストーリー通りに動く

のは、癪に障るが効率がいいのは確かだ

しかし「本物」のなのはが居る今

いつ、どのタイミングでこのか姉に入ったかわからないが

彼女がユーノを見捨てることはまずあり得ないだろう

たぶん彼女も原作通りに動くか、それ以上の成果を上げるだろう。

それが、悔しい。それが……憎い。

過ごしてきた年はたった5年。でも、たった5年だけど、俺にとっては

大切な思い出が詰まっている。そして、そこにはいつもこのか姉がいた。

なのに……なんで!?

なんで!?

なんで!!

涙を隠しながら走りだした。

「まって！話を聞いて!？」

だが、直ぐに追いかけてきた、そして彼女はあろうことか、俺に捕縛魔法をしてきた。

ふざけるな！俺は剣の丘に刺さっている剣を投影し強化を施し捕縛魔法を切った。

「え!？」

驚いているが関係ない。逃げるのをやめて、彼女と向き合う。

「・・・やっとはん」結界・・・張れるんでしょ?」「・・・え?」
「結界・・・張れるかと聞いているんだ!」
「張れるけど・・・どうするの?」

どうするか・・・だと?決まっている。

「私はお前を認めない。．．．私が．．．私が！私が見守ってきた姉さんは！魔法なんか使わない！」

黙って、俺の叫びを受け止める彼女。

「．．．ねえ．．．？返してよ．．．私と姉さんの時間．．．想い出．．．魂を．．．．．」

俺の攻撃的な魔力の発現に気付いたのか、はたまた、そう予感していたのか。

平日の昼過ぎの道路に結界を展開した。

「姉さんを．．．．．返せえええええええ！」

その言葉と共に、俺は彼女に突っ込んでいった。

正体（後書き）

姉妹喧嘩勃発

絆

俺は……馬鹿だったのだと思う。このか姉が居なくなった。この事だけが、頭を埋め尽くしていた。今思うと。いや……
本当は、最初から認めていたのかもしれない。

確かに彼女は……

高町 このか

であった。

「話を聞いてよ！」

うるさい。俺は脚に強化を掛け飛びかかったが

「プロテクション！」

ピンク色の障壁に阻まれた。

だが、瞬間、落とせる・・・!と思った。

デバイスが無いせいで、一回一回の魔法の発動が遅い。

だが、相手は3次元の回避が可能だ、ならば・・・ならばどうするか？

決まっている・・・魔法を発動した瞬間にカウンター気味で一発く
れてやればいい。

そう、思っていた。だが、俺は忘れていた。

彼女が天才だということに。

「アクセルシューター！」

直後、ピンク色の魔力弾が俺に襲いかかった

その数・・・12

「ちい！」

俺は、直感に頼り体を捻らせていく

避け切れないものは斬っていく。だが、俺はまたしても忘れていた。
・
・

この魔法は、回避するだけでは凌げないと。

さらに追加された誘導型の魔法

目の前にしか意識がいていない俺は、後ろから襲いかかってくる魔法に気付けないでいた。

ぞくっ

第6感が警報を鳴らす。が、もう遅い

振り向きざまに木刀を振ったが………空振り。

「があ！」

直後、衝撃がきた、殺さないように注意をしているのだろうかかなりの衝撃だったが……まだ戦える。

そして、その事実気付いて……腸が煮えくりかえった。

なめるな！

転がりながらすぐ態勢を立て直し彼女に向かって跳躍する

「嘘!？」

決まったのだと思ったのだろう、普通の5歳児なら気絶するかしなかったとしても、直ぐ動けるはずもない。
いや、事実こんな早く態勢を整えられるはずがない。
跳躍する際、何か切れる音がした。だが、そんなのは関係なかった。

「うあああああああ！」

魔力弾が体をかするうとも、当たろうとも関係ない。
ただ、ただただ俺は、一発殴ってやりたいと思って
ありつたけの魔力を注ぎ、ありつたけの強化をし、思いっきり振り
下ろした。

わたしは、この子が「わたし」をいつも見守ってにくれていたのは
憶えてる。

だから、いつも通りに接して、いつも通りにこの日も平和に終わる

はずだった・・・
終わらせるはずだった。

焦ったのがいけなかったのだろうか？

道場で現在の状態を把握するために結界を展開し、魔法に打ち込んだ。

9歳から「彼」に教わってきたのだ。精度もデバイスが無くて也十分に合格点だと思った。

多少魔力があるから見破れる・・・そんなわけが無いはずだ。

昼を呼びに来た時の声の調子が、「いつも」より冷たかった。ただ、原因何て分かるはずもなく庭先にいる事を焦って返事をしダインングへいった。

そして、食べている時、ふと、聞こえた。聞こえてしまった。

「ネエサンハ・・・ドコニイルノ？」

その言葉を口にし、食事をやめ、わたしは顔を見た。

そこに浮かんでいたのは・・・虚無。

だけど、それも一瞬であった。

なんでもないよ。

凄く、悲しかった。寂しかった。・・・心が・・・痛かった。

思わず聞き返していた。そして、予感がしていた・・・

「わたし」に気付いてしまったのだと・・・予感がしてた。

でも、それでも、「わたし」はここにいるよ？と教えてあげたくて心配で、どこかへ、行ってしまいそうです。だから、最後まで「いつも通り」

を通そうとした。それが、いけなかったのかな？

あなたには関係ない

直ぐに否定したかった。だから、真実を

「わたし」の真実を話そうと口を開いた。

だけど

話そうとした・・・けど、次に来た言葉は

否定の言葉であった

その時の表情は狂気と憎しみと悲しみが映っていて
すべて、そのすべてが私に向いていた。

そして、駈け出して行ってしまった。

その姿が、娘を亡くし、狂気に溺れた彼女と重なって

そして、確信した。放っておいたら、取り返しがつかなくなる・・・
と。

そして、確信した。「わたし」に気付いていると・・・・・・・・

止めなくちゃ！

わたしも駈け出し靴を履くことも忘れ玄関をくぐった。

はやい！？

本当に5歳児なのか、このままだといけないと思って
とっさにバインドを放出していた。

捕まえたら、真実を話そう。ほっとするのも束の間。

振り向きざまに魔法を斬られた

嘘！？わたしは信じられないと思った。
どうやって斬ったのか？答えは目の前にあった
バインドを斬ったのはその手にある木刀

いつの間に!？

魔法陣が出ていないから、察するにわたしが知っている魔法の分類
じゃない。

じゃあ、あれはいつたい・・・？

だけど、そんな事を考えるよりも今は目の前の事だ。
幸い止まっている。話を聞いてくれるのかと思ってたけど・・・
・・・違った。

結界・・・張れるんでしょ？

悟った。今の彼女は、自分の感情に支配されている。
悟った。わたしは・・・拒絶されている・・・と。

でも、それでも、分かりあいたくて。また「一緒に」笑いあいたくて、泣きあいたくて、幸せを感じあいたくて。

だって………私たちは……世界中、この広い世界でたった一組の………双子だもの。家族だもの。

結界を展開する。禍々しい魔力。もう……後戻りはできない。

思いつきりぶつかり合おう。

マルチタスクを用いて展開しながら臨戦態勢に入る。

そうだ。わたしはいつもそうしてきたじゃないか。

そうして、わたしたちのぶつかり合いの火ぶたが切って落とされた。

強い

交戦して直ぐに思った。

プロテクションで攻撃を防いだ時の重さが尋常ではなかった。

わたしが、今5歳児だとしても、そのことを差し引いても重い攻撃だった。

距離を空ける。幸い向こうは飛行する手段がないようだ。

自分が信頼している魔法で一方的に終わらせようと思った。

アクセルシューター

非常に使い勝手が良いこの魔法で勝負を決めるまではいかないが有利に運ぼうと思った。

だけど、どういうこと？

あるうことか、小さな体を生かして誘導弾を避けて行ったり時には斬り裂いている。

ありえない。

でも、甘い。

後ろが疎かになっている。目の前の誘導弾で牽制し視界を隠す。

その隙に一発後ろに回り込ませ機会を窺う。

態勢がすこし崩れた瞬間、誘導弾を当てた。

呻いて転がる。

その姿が痛々しくて、ほんの少し、覚悟が揺らいでしまった。

それがいけなかったのだろう。無理な形で態勢を立て直しそのまま
跳躍。

嘘！？

でもまだ少し距離がある。

誘導弾を当てて距離を離そうと思った。

でも、当てども当てども・・・止まらない。

だったら！自分と彼女の間に誘導弾を置いて・・・爆発させた。

「うああ！」
「きゃあ！」

確実に、落とせると思った。
でも、これが素人とプロの差なのだろう。
俺と彼女の間に誘導弾を置いて爆発させ、ダメージを軽くさせた。

残念ながら俺の魔力じゃ届かなかった。

視界がぼやける・・・落ちた時頭でも打ったか・・・？
手足が動かない・・・もう・・・動けない・・・

頬に涙が流れた。不甲斐なくて、悔しくて・・・悲しくて。

誰かがそばによる音がした。

誰か・・・じゃないな、彼女しかいない。

俺は首を動かし、彼女を見る。

足を引きずって、されど、確りとこちらを見つめて。

「・・・・・・・・びっくりした？」

は？何を言っているんだ？

「わたしもね、びっくりしたんだ。いきなり目の前にわたしがいて、お母さんがいて

でも、それは夢だと思った。だって、そんなのありえないから」

語りかける彼女

「で、あなたに言われてわたしの記憶を遡ろうとしたら、そしたら急に頭が痛くなって

耐えきれなくて、何だかわからないけど、認められなくて」

・・・・・・・・

「そして、夢で「わたし」と出会ったんだ。ふふ・・・その時「わたし」が何て言ったかわかる？」

わかる・・・はず、ないだろ。

「『なのはにひどいこと言っちゃった！どうしよう！？』だって、凄く慌てていたんだよ？」

笑いかける彼女。その笑顔を俺に向けないでくれ・・・

「だから言ったの。』だったら、一緒に謝ってあげるよ。』ってね」
「そ……んな、妄想……だ、れが……」

認めるか。でつちあげだ。

「『でも……わたし……』って躊躇してた。じゃあ、『なのは
って子はどんな子なの？』って聞いたんだ」

俺の気持ちを無視してか、口を閉じない彼女。

「そしたら、でるわでるわ……たくさんお話ししちゃったんだ。」
聞きたくない。

「『じゃあ、なのはの事は好き？』って聞いたら」

やめろ……

「『当たり前だよ！大切な妹だよ！』って「やめろおおお！」」

「なんで……な、んで！そんな事を話すんだ！？それに何の意味
がある！？」

俺は体の痛みをこらえ叫ぶ。

「……だったら一緒に謝りに行くって。そしたら許してくれる
って。」

『じゃあ、わたしたちで謝りに行くって！』そう言ったら、全部思い

出したんだ。

わたしは最初から「わたし」だったということを「

「な……に……?」

「そしたらいつの間にか一つになっていて、眼が覚めたの」

彼女の瞳から一粒の涙が流れた。

「そして、謝ったの。そしたら、あなたは許してくれた。それが……嬉しかった。

でも、もう一回お礼を言わせて?……ありがとう……」なのは「

」

その笑顔は……俺の姉である人物と……全く一緒であった。

「う……うあああああ!」

泣いた。何を早とちりしたんだ。俺は自分の事しか考えられなかった。

自分が被害者だとずっと思いこんでいた。だがそれは逆だ。

人の心を、理解しようとしていなかった。むしろ、俺が彼女の存在を潰しているというのに。

だが、彼女は笑いかけてくれた。心配してくれた。俺は……俺は……! ! ! ! !

ふわ、っと俺を包み込んでくれた。

「うめんなわー！うめんなわー！」

俺が泣きやむまですっと……ずっと……手を握って包み込んでくれた。

真実

あの後、どうにか家まで行き、汚れを拭いてベットで寝た。その際左足が凄く痛くて、解析してみたら肉離れを起こしていた。たぶん無理して跳躍した時だと思う。

回復魔法なぞ使えるはずもなく、このか姉も使えない。よって自然治癒か病院へ行くという選択肢ができた。

しかし、その前に家族にどう言い訳しようかなと思いつながら、ベットの脇に座っているこのか姉が口を開いた。

「ねえ……なのは」

「なに？……あー……姉さん」

「ふふ……ありがと」

つん、とおでこをつつく。

「で、どうしたの？ねえさん」

「魔法が使えるという事を……その、家族に黙っていて欲しいんだ」

「何言ってるの？そんなの当たり前だよ」

そう、俺だって黙っていたのだ。

なら、俺がそんなこと言うはずがない。

今このタイミングで話せば家族に負担を掛けさせてしまうし、混乱してしまう

話せるタイミングになるまで話さないのが無難だろう。

「ありがとう」

「でも、何で魔法できるか説明してね？」

「なのはも、何でできるか教えてね？」

二人で承諾し合い、まずこのか姉の話聞く。

「未来から来た……って言ったら……信じてくれる？」

内容はこうだ。

自分はこの時代を生きた事があり、これから起きるであろう事件も知っている。

そして、事件に巻き込まれて「魔法の存在」を知った。

大きな事件も解決して、日々仕事に生きていたが新しく来た仕事は、厄介な物が中心の仕事であった。

その厄介なものが「ロストログア」と呼ばれる物だ。

仕事自体は簡単であった。不法所持のロストログアを回収するために所持している犯人を無力化させ、逮捕するだけであった。

が、犯人は追いつめられた時、自身が持っているロストログアを発動させて悪あがきに出た。

ロストログアが発動して目の前が光に覆われて、気付いたら過去に戻っていたという。

その際、「管理局」や「ミッドチルダ」その他逆行してくる前の周

りの状況は語らなかつた。

そして、何故か自分は「このか」と呼ばれていて、それを疑問に思い、俺に言われて思いだそうとしたら急に頭が痛くなり、そして戦った時に言っていた通り、夢を見てすべてを思い出したらしい。

推察するに、ロストログアに巻き込まれ、それが原因で情報の塊が逆行していったのだと思う。

本来ならば徐々に思い出すのが自然な形であつたと思う。なぜなら頭が膨大な情報に追いつかないからだ

故に、体が完成して脳が耐えられると判断したら情報を引きずりだすのだと思う。

だが、痙攣を起し、その際に「何らかの原因」で情報が一気に蘇る。しかし、自身は眠つたままだ

するとどうなる？ そう、「自覚できなかった」のだ。結果、脳が処理しきるために限界以上に回転し

気絶してしまうという事になった。夢の中では、たぶん記憶の整理のためにそのような形になつたのではないのかと思う。

夢から覚め、現状確認のため魔法を試した時、魔法の光が一緒だつたので、「このか」だけど、過去と同じ体であると確信した。

「でも、その時はわたしに双子何て居なかつたし、このかつて呼ばれていなかつたんだ」

「そうなんだ・・・じゃあ、何て呼ばれていたの？」

「その時は、なのはって呼ばれてたんだ」

複雑そうな顔でこちらを見るこのか姉

「だけど、わたしはもう「このか」で生きることに関心したの」

真剣な顔になりそう、このか姉は、何か決心したような強さが見える。

だが、胸中は複雑であろう、しかしここで水を差すような真似はしない。本人が決めたのだ。それに体が過去の自分と同じと言っている。

しかし、そうすると俺の体は一体・・・？

「今度はなのはの番だよ？」

そう考えたのは一瞬で俺は思考を切り替え、どう説明したものかと頭を捻らせた。

簡単に言うところの世界がアニメの世界に似ているという事を話さず自分が死んでここに来たということも話さずに誤魔化し、いつの間にか赤ちゃんだった。

能力は本能レベルで理解していたので、このか姉が寝ているときに試した。

という二つの点を話した。

これには理由がある。まずこの世界がアニメに似ている何て話しは信じてもらえない。

さらに、ここまでイレギュラーがあるのだ。もう自分にもストーリー通り進むという確信が得られそうにない。

タイムパラドックスが起きたり、原作に出ている人物が死んでいたりするかもしれない。

正直、自分も原作の知識が曖昧でフルボッコにしているシーンや個人的に感動した場面しかもう具体的に思い出せない。

故にこの話をして信じられないのもそうだが、もうほとんど役に立ちそうにも無いと思ったからだ。

二つ目のいつの間にか赤ちゃんだった。これにはそこまで深い理由は無い。

「自分が死んで転生した」何て言ったら、このか姉が心配しまくと確信できる。

それに、すでに自分が割り切っている事だから今更掘り返しても意味がないと考えた。

事実はどうやってもひっくり返らない。

転生についてだが、これは「自然な形」で生まれ変わったからだと推測する。

しかし、そうすると情報を処理しきれなくなるのでは？と思うが、俺もそう思う。

ただ、自身が母の腹の中から情報を処理していた、とするならどうだ？

何カ月もかけて処理をしていき、生まれた時には「普通」に生まれてくる。

俺はそう思っている。ただ、それが真実かは分からない。

カミサマという突拍子もない存在が力を働かせたのだ・・・自身が

理解できる範囲を超えている。

まあ、そこは深く考えないでおこう。「我思う故に我あり」だ。

能力に関しての件は、いきなり「カミサマから授かった(笑)」「何て突拍子もない事を発言でもしたら

黄色い救急車を呼ばれそうだ・・・それは歓迎できない。ただこのか姉は何だかんだで納得してしまいそうで怖い。

さらにすべてが嘘ではない、自身、魂か本能レベルでやり方が理解できているという事実がある。

なので、どうしてそれが使えるって分かったの？何て聞かれても理解できるからで押し通そうと思っている。

「そうなんだ・・・結構災難だったね」

「それはお互い様だよ、姉さん」

「それじゃあ、いつの間にか赤ちゃんだったんだよね？」

俺はその問いに頷きで返答する。

「赤ちゃんになる前の性別って憶えてる？」

な・・・なん・・・だと・・・？

ま、まさかここでこう来るとは・・・いつそ憶えてないで通りそうだが・・・

いや、通る。もう男の尊厳は・・・いや、「勲章」は俺には付いていない。

だが！まだ男としてのプライドや本能も残っているというのもまた事実！

それに・・・今までの言動が男みたいなのを感じ取り、中身の性別を疑っているのか？

ば、馬鹿な・・・それだとしたら「俺は男でした」何て言ってみる・

・・・母さんのおっぱいを

ねっとりと吸ってきたのだぞ・・・そしてその光景をこのか姉は隣で・・・見ていた。

さらに！美由紀姉のおっぱいも堪能した事実もある！しかもそこにもこのか姉が居た！！

非常にまずい展開だ・・・予想の斜め上じゃない・・・直行で地獄の門まで案内された気分だ・・・

このか姉が憶えていないにかけるか？・・・いや、それは無い。なぜならこのか姉は「すべて思い出した」

「最初から一つだった」と言っている・・・憶えていないはずが・・・無い。どうする！どうする俺！！

「憶えてないの？」

物凄い笑顔だ・・・笑顔なんだけど、レイ八さん持っていたら確実に俺に向けて構えている。

もう無理か・・・そうあきらめていた。絶望を感じていた。真実を話して少しでも罪を軽くしよう・・・

そう思い口を開こうとした。

「たっただいまー！」

女神だ・・・女神が俺に降臨した・・・いや、救いの手を差し伸べてくれた・・・

その手を俺は絶対に掴むため

「おかえりー！美由紀姉ー！ちょっと部屋まで来てくれない!？」

勝った！！何に勝ったかは分からないが俺は勝ったんだ！

「ごめんねー！これから直ぐ行かなくちゃ行けない所ができちゃったんだ！」

少ししたらまた帰ってくるよ！そう聞こえた後

玄関の扉が開く音がして・・・閉まる音がした。

女神は・・・伸ばした手を・・・掴むどころか、振りほどいてしまった・・・

しまった！俺はある重大な事に気付いた。

言葉が足りなかった！「怪我をしている」という一言を付け加えるのを忘れていた！！

「憶えて・・・ないの？」

どうやら俺には、後悔する時間もなさそうだ。

その後の事はよく覚えていない。

ただ、気付いたらこのか姉が物凄い笑顔で

「まだまだ時間あるし、これから確り「教えて」上げるから大丈夫
！」

何が大丈夫なのかは分からないが、俺は頷く事しかできなかった。

それから、家族が帰ってきて二人の怪我の事を聞かれたけど

「姉さんと喧嘩して殴り合ったから」

ということにし、肉離れは

「盛大にこけた」

ということにしておいた。家族は納得いかなかったが
二人して家族に全力で謝り、勢いで押し通した。いや誤魔化した。

肉離れの件は病院へは行かなかった。

やはり武家の家柄、こういう怪我に対しての適切な治療を心得ている。

肉離れだし病院に行ってもたいして変わらないだろう

ただ、やはり心配なのか病院へ行こうという催促があったが解析でそこまで重症じゃないという事実が分かっているため寝ていれば治るという事を前面に押しして渋々了解してくれた。

なお、このか姉と俺は全員から散々説教されたということを追記しておく。

その日は美由紀姉と一緒にシャワーを浴びたけど、何故か何もする気が起きなかった。

そして、次の日。

「魔法を教えてください」

昨日暴露話をしたんだし、遠慮することは無いかな・・・と思いつ、このか姉に頼み込んだが、最初は渋っていた。

それは魔法というものがいかに危険かという事とこちら側に引きこんでしまう。という事だ。

だが、持てる力は伸ばしたいし、力を持っていれば自然と巻き込まれるのは必至だ。

その時に何もできなければやられるのを待つだけだ、それは非常に歓迎しがたい。

それに、こちら側何て、力を持っていればもはや片足を突っ込んでいる状態だ。

「ん〜・・・わかった。でも使うべきところを間違えないでね？」

交渉の末、何とか了承を貰った。

「ありがとうございます、姉さん」

「それじゃあ早速基本というか、便利なものから教えるね？」

よろしくお願いします。と、言い何を教えてくれるんだろう？と期待して待っていると

《この声が聞こえる？なのは》

いきなり脳内に響いたこのか姉の声。たぶん念話だろうと分かっていたけどこれは

「うわあー！」

ビビった。

《ふふ・・・これは念話と言って離れた所でも会話できる便利な魔法だよ》

頭の中に響く声

「返すにはどうしたらいいの？」

《念じて、私に声を届かせるように》

《・・・こつこつ？》

《そうそう！上手上手！》

すごく・・・面白いです・・・

投影や変化といった物とはまた違う感じがして楽しくなって来た。

やはり俺は日本人なのだろう、相手を傷つける魔法より、こつこつた魔法の方が性に合っている。

が・・・何というかやはり物足りない。

《今現在で教えられるものは無い？》

勿論念話で聞いてみた。

《今じゃちよつと・・・》

と、渋られたけど

《魔法つぼく魔法陣なら展開する事も出来るよ？》

なんだと？でも、一つ疑問に思った。

《魔法を発動しないといけないんじゃないの？》

もうほとんどうる覚えだけど、そう記憶している。

《確かに魔法の起動時に魔法陣が展開されるけど、それは詠唱してそのままキーワードを唱えるからだよ》

言ったん念話を区切り、一息入れた。

《一般にデバイスと呼ばれる機器がその詠唱を術者の肩代わりをしてくれて、キーワードを唱えるとデバイスが術式に魔力を通して魔法が発動するんだ》

何とか付いていくが・・・というより、そこまで複雑だったのか。

《でも、今はデバイスが無い。だからその工程を自身ですべてやらなければいけないの》

そりゃそうだ、デバイスが無いんだから仕方がない

《でも、どうしても術者だけだと魔力の暴発が起きてしまう可能性がある。それを防ぐには自分で設定するパスワードが必要な》

あれか、このか姉と俺の場合「リリカル・マジカル」か・・・今考えると少女であるからこそ許される詠唱だな。

《そのパスワードを決めてパスワードを唱え、魔力を流せば魔法を制御するために魔法陣が展開されるんだ》

なるほどな・・・つまりそれを設定しない事には言外に念話以外の魔法の練習は難しい、と言っているのか。

《それは自分で決められるの?》

《うん。私の場合は心の奥から聞こえてきた言葉を使っているし、
こういうのはインスピレーションでいいのかもしれないよ》

だから、難しく考えないでね?と説明し、簡単に「感覚的なやり方」
を教えてくれた。

感覚的な事が通用するのは天才だけですよ……このか姉。

うーむ……すっかり、インスピレーションねえ……いや、これ
しかあるまい

「リリカル・マジカル」

目を瞑りながら魔力を流そうとする………が、何も起きない。

「何……やってるのかな?」

見ると良い笑顔でこっちを見つめるこのか姉。

「あれ?」

確か、なのははこの呪文で合っているはず何だが……

「それは、わたしの呪文だよ・・・というより、見られてたんだね」

「う、うん・・・ごめんなさい」

「あはは・・・いいのいいの。もう過ぎた事だしね？」

このか姉の優しさを身に染み込ませながら考える。

俺もこの呪文なり・・・ん？何か引つかかる・・・

「もっと心に耳を傾けて？」

そう言われても・・・と思っているが、できないものは仕方がない。

それに、だらだらしていると怒られそうだ。

心に耳を傾けるため目を閉じ集中する。心から聞こえてきたのは・・・

トレース・オン

「詠唱開始」

展開される魔法陣。

そっと目をあけると・・・俺を中心に描かれている真円の魔法陣の色は・・・血の様な濁った赤だった。

(ピンク色じゃない!?)

そう、俺はピンク色と予想していた。何故か？

それは俺の体が 高町 なのは の体と思っていたからだ。

だがそれは勘違いであった。このか姉も言っていた通り「過去と同じ体」と語っていた。

そして「リリカル・マジカル」の呪文が何の反応も示さなかった。

つまり俺は、初めから勘違いしていたのだ・・・俺が原作の 高町

なのは の体だという事に。

最初から俺がオリ主だったのか・・・。

「どうしたの？さつきから難しい顔して」

「うん・・・世の中ままならない事がおおいなあと、しみじみと実感して・・・」

「そ、そうなんだ・・・」

思考を放棄したくなる。

チートかと 思っていたら 違ってた

一句できた・・・季語は無いけど。

ま、まあ双子だし！魔力ランクの方はき、期待大だな！うん。

自身で解析して調べられるのはできるんだけど、「基準値」が分か

らない。
というより、「自身の魔力がどれくらい減っているか」という事しか分からない。
ただ、最低Sランクなのでこれで十分だと思っし、欲を張ると罰が当たりそうで怖い。

「じゃ、じゃあ、今度はなのはの魔法の事教えて？」
「うん・・・わかった」

気疲れして、今すぐ眠りたいけど我慢する。

掻い摘んで説明すると、固有結界と乖離剣エアの事は黙って、その他の魔法の事を説明した。

この二つを省いたのは理由がある。それは、二つとも「規格外」だからだ。

固有結界は勿論、乖離剣なんか目の前で出したら桁外れの魔力量で確実に色んな意味でアウトになりかねない。

それは避けたい、是が非でも避けたい。故にこの二つは説明しなかつたのだ。

罪悪感はある。だが、切り札はなるべく晒さない方がいいと思った・・・万が一というのもありえるしね。

「へ・・・ブーストに似ている所もあるんだね」
「そうなんだ？」

「うん、ただ・・・魔力を物質化したり、本質を見抜いたりする魔法は・・・はんs・・・め、珍しいね」

反則と言おうとしたのだろう、俺もそう思う。

結界の構成が本質的に理解ができるから結界類はあまり効果をなさない、弱点が見えてしまうからだ。

物質化は言うまでも無い、AMFだったか？それをほぼ素通りできるからな。宝具なら爆発させる事が出来るし

「やっぱり、根本的にわたしが使っている魔法とわたしが知っている魔法と違うんだね」

「だと思っよ。そっちの魔法はあまりわからないけど」

「うーん・・・それらに合う魔法だったら移動系や飛行系、近接系がいいと思うから、憶えてる範囲で教えていくね？」

「ありがとう、ねえさん」

「ただし！怪我が治るまで座学をたっぷり教えてあげるから」

「・・・ありがとう・・・ねえさん」

語尾に音符マークが付きそうなくらい、軽快に言うこのか姉。

・・・憶え・・・られるのかな？

名前

今日もこのか姉と一緒に魔法の練習。

道場に言っつて、簡易の結界を張り、今は飛行魔法の練習中だ。

「フライアーフィン」

血色の光の翼が足に生える。ふわりと浮く自身の体・・・
そのまま1メートル位上がり停止する。

「それじゃ、今からほとんど威力の無い魔力弾を放つから、最低限の動きで避けて行つてね？」

「わかりました。姉さん」

一応、教えてもらつ立場なので敬語を忘れない。
放たれる魔力弾。数は・・・10

ひよひよいと直感に頼つて避けていくが・・・

「うわぁー！」

15分位して急に動きが良くなった魔力弾。

それに対応してすっかり直感に頼ったり、自身で判断したりして避けていた

が、まだ魔法の構成が甘いのか、自身の制御や扱いが甘いのか。

……まあ、後者だと思うが。

ともかく、思い通りに動かなくて魔力弾に当たってしまった。

「ん〜……まだまだ、甘いよ?」

「次!次、もう一度宜しくお願いします!」

「ふふ……その調子だよ?」

こうして、家族が居ない時間を過ごしている。

あの時から約一年。

父も退院し、家族が漸く元通りになった。

だが、一方、俺の胸のもやもやが日々に増している。

家族が、俺に向けて笑いかけてくれる時が何故か一番……辛い。

このか姉と何時、家族に俺たちの事情を話すか?と相談した所。

やはり、父が戻ってきて、翠屋がある程度落ち着いたらと言ってきた。

魔法関連は、事件が終わって、自身で進路を決めたらという事になった。

それには俺も賛成だ。・・・だが、もうその時期なのにその話を切り出そうとしない。

何故だかわからない。このか姉が何を考えているのか・・・わからなかった。

「いつてきます」

「行つてきまーす!」

「留守番頼んだわよ?このか、なのは」

「二人とも良い子で待っているんだぞ?」

そう言つて、皆、それぞれの場所へ行つてしまった。

二人きりになり、まず最初にやることは冷蔵庫の中の確認だ。

これは、昔から変わっていない。変わったと言えばこのか姉も手伝つてくれる時がある。

が、基本何か考えているのか、こちらを見てうんうん唸っている。

作る料理を決めて、足りなかった場合、食材を買いに行く。

ただ、今日は十分足りると判断したので、そのまま部屋へ行き魔法の座学だ。

元教導官のおかげか、非常に分かりやすく、以外に術式が理解できる。

これには、このか姉もびっくりしていた。俺もやればできる!・・・たぶん。

そして、昼飯を簡単に作る。今日はチンジャオロースだ。ご飯を盛り、小皿にチンジャオロースを個別に盛りテーブルへ運んでから

「いただきます」

ぱくぱく食事を食べていて、そういえばスープ無かったなと軽く後悔していると

「ねえ、なのは」

「何？ねえさん」

このか姉が何か問いかけてきた。

「なのはの、魔法ってさ……うん。魔力物質化って……もしかして、見た事あるものか
自身に馴染み深い物しか物質化できないの？」

「う、うん」

いきなりの質問で戸惑ったけど、おおむね間違っていないので返事をする。

「でも、そうすると、木刀だけじゃなくても……こう、極端な話をするとか、ベットとか

服とかもできるはずだよね？」

「そ、そうだよ」

確かにできる。防具とか投影できるしな。

「でも、なのははそれをしない・・・何で？」

「それは・・・意味がないから」「それは無いと思うな」

・・・気付かれたか？

そう、馴染みがあるものが投影できるのなら、極端な話テレビ、椅子、机・・・色々な物を投影できるはず

そして、それを生かして攻撃から身を守るための壁にできるはずだ。元が魔力だからな。

でも、UBWは「剣」が一番の属性だ。だから、「剣」に近い木刀を毎回投影していた。

「毎回毎回木刀・・・馴染みがあるからで確かに説明できる。けど、何か違う・・・」

じーっとこちらを見るのか姉。冷や汗が垂れる。

何秒か、何分か。わからないけど、俺には物凄く長く感じた。

「・・・・・・・・ふう・・・わかった。話したくないんだったら、無理には聞かないよ」

「あ・・・・・・・・」

「ごちそうさまでした。今日もおいしかったですよ？」

そういつて、食器を下げ部屋へあがって行った。・・・俺は見送る事しかできなかつた。

・・・これで・・・この様で・・・転生者・・・か・・・

ほんと、笑わせる。これじゃ、ただの頭が少しいませたガキと変わらないじゃないか・・・。

もう、取り返しがつかないのかな・・・そう思いながら、食器を洗いに行った。

その日は一日中、暗い顔をしていたと思う。

このか姉はいつも通りに接してくれた。けど、それが余計に・・・辛い。

家族が帰ってきて。ただいまと、笑顔をくれる。

胸が張り裂けそう。俺にはそんな権利なんて無い！そう叫びたかった。

「・・・のは！なのは！」

「えあーうん、ど、どうしたの？」

「いや、元気が無いから、どうした？と思ったんだ」

父が心配してくれているが、全然耳に入って無かつた。

俺はここに居ない方がいいかもしれない。でも、心地いい。

これは、我が儘だ。でも、怖い。真実を話すのが・・・怖い。

もし、拒絶されたら、俺はどうする？
気味悪がられたら・・・家族じゃないと言われたら・・・

「なのは！・・・全く・・・ふう、しょうがないなあ」

そう聞こえた後

ひよい

俺の体が抱えられた。

「ちょ！と、父さん！何？」

「ははは！いや、話を聞いてなかったからな。俺と風呂に入る事になったぞ！」

ははは！と笑う父。いや、別に構わないけど・・・

「一人で入れるよ？」

「いいじゃないか！今日ぐらい！な？」

そう、言われれば、別にいいかなと思って、頷いて抱えられたまま風呂場へ行った。

「ふうく気持いな・・・なのは」
「そうだね・・・」

いっしょに湯船に浸かる。

やはり、お風呂はいい・・・が、今日の気分で入ると余計にブルーになってしまう。

ふと、視線に気づいた。じいーっとこちらを見つめる父。

「どうしたの？」

「いや・・・なあ、なのは」

「何？」

「・・・俺が居ない間に・・・何があった？」

ぴちよん

お風呂場の中に木霊する水の滴る音。

何があったか・・・か・・・色々ありすぎている・・・俺の隠し事が。

父が帰ってきてどれだけ大変だったかと、こんな事があったと結構家族で話し合った。

その際、俺とこのか姉の喧嘩の時は笑っていたな・・・ただ、大事に至らなくて良かったよと言ってくれた。

このか姉が鍛錬に参加していて驚いてたっけかな・・・このか姉に怒られてたけど・・・でも、俺たちが鍛錬に参加するだけで嬉しいのか頭なでてくれて、一緒に走ったっけ。母も毎回心配してくれていたし、なるべく一緒にいようとしたっけか。恭也兄も無愛想ながらも陰で見守っていてくれるし、美由希姉はよく気にかけてくれる。

これほど、これほど愛情を貰っている・・・貰っているのに・・・俺は・・・何をしている・・・そうだ！今がチャンスだ！話せ！何やってるんだ！俺！？口が開かない・・・壊れてしまうのが怖い。一步前へ踏み出すのが・・・怖い。怖い・・・怖い怖い怖い・・・はは・・・俺って、こんなにも臆病だったんだな。

「・・・なあ、なのは、俺はさ・・・お前ら二人には、いつも元気で育って欲しいって思っている」

俯いている俺に語りかける

「俺が事故で怪我をして、お前らが大変だったのは聞いている・・・すまなかった」

それは父のせいじゃないと言おうとしたが

「そして、このかが変わったという事も聞いている。・・・正直、俺は自分を殴りたかった。娘が悩んでいる時にそばにいてやれなくて」

・・・

「そして、帰ってきて、お前ら二人を見た。・・・確かに、変わっている。大人びている。・・・だが、それがどうした」

「え？」

「お前らが何になるうが、ここから離れようが・・・お前たちは俺たちの娘だ・・・家族だ。誰が何と言おうとも」

「で、でも・・・こ、怖く無いの？べ、別人かも知れないよ？」

「確かに、あの変化は・・・正直別人だ。俺の娘が居なくなっただと思っ」

「じゃ「だけどな」

「それでも、やっぱり・・・どんなになるうと、俺たちの娘なんだよ。家族なんだ」

俯いていた顔を上げ、父の顔を見る。真剣な眼差しでこつちを見ている。

「なあ……なのはは、何を悩んでいるんだ？」

「……」

言える。言えるけど……駄目だ……怖い。

このか姉は確かに別人に近い存在だけど、それでもやっぱり 高町

このか だ。

だが、俺は？俺は「初めから」違う存在だ……もしかしたらこの体の魂を喰ってしまったのかもしれない。

それが、知られたら。絶対に拒絶される。返せと言われる……
・家族じゃないと言われる。

怖い。あと一歩。この一歩が……どうしても踏み出せない。何で？……わからない。わからないよ……

「……ふう〜、そうだな。一つ、昔話でもするか。お前らは憶えてないが、というより、桃子さんのお腹の中にいた時だ」

〳6年前〵

「そんな!？」

桃子さんの声が診察室に響く。

懐妊して、何カ月か経ち、定期健診での事だった。

それまでは、双子という事が分かり、いままで順調に育ってきた。だが、今回の検査で片方の赤ん坊に異常ができてしまった。

「……双子のお子さんの内、一人は元気です。ですが、もう片方は……」

「それは、本当ですか……?先生」

「ええ……異常が、脳に異常が見られます」

「そんな・・・な・・・」

脳が出来上がってきて直ぐ、片方の赤ちゃんに異常が発生した。それは、「脳が異常に発達している」という原因不明の事だった。発達というのは別段悪く無い。当り前だ、成長しているのだから。しかし、「お腹の中」で異常に成長していつている脳は・・・有り得ない。

何故ならば、「何も経験、見ていない」「異常に成長する要素が無い」からだ。

しかし、今、何らかの原因で脳が異常に発達し、最悪の場合、成長途中の脳が耐えきれなくなり・・・死んでしまうかもしれない。

「どうにかならないんですか!?先生!」

「原因がわからない限り、手の施しようが無いのが・・・現状です」

「嘘・・・」

お腹に手を当てて俯く桃子さん。

そのお腹の中には、二つの命がもう、宿っている。

だが、どうにもしてやれない。

理屈では分かっている。だが、感情が追いつきそうにない。

「本当に、手の施しようが無いのですか!?!」

「・・・残念ながら、運を天に任せるしかありません」

俺は、無力を嘆きながら桃子さんを支え診察室を出た。

「くそ！」

俺は、どうする事も出来ない自分に腹が立っていた。

ここまで人間とは無力なのか、俺は・・・自分が許せそうにない。俺が原因じゃないのは・・・分かっている。原因不明というものも分かっている！

でも！それでも！感情が、納得いかなかった。

そんな時だ

「ねえ、土郎さん」

「ど、どうした？」

「この子たちの名前・・・決めませんか？」

一緒にのベッドで寝ている時そう聞こえた。

桃子さんは、まだあきらめていない。

それなのに俺は、自身を嘆いているだけであった。

強い

何が？・・・そんな物は決まっている。

心が強い

「そうだな・・・そうしよう！桃子さん！」

「ふふ・・・この子たちにピッタリな名前をつけなくちゃね？」

「ああ・・・ああ！そうだな！」

俺たちは、不安を隠し、希望を込めて、どんな名前がいいか、頭を悩ませた。

分娩室前。

とうとう、出産の日がやってきた。

こどもの体を心配し、何日も前から病院へ入院し、万全な状態で出産に臨んだ。

脳の異常は、何とか耐えきれたらしい。ただ……

「何とか耐えきつてくれました。ただ、正常に脳が働くかどうかは……わかりません」

「どういう……ことでしょうか？」

「異常に発達してしまった脳は、もはや、我々でも予想がつかないのです。さらに、脳と体の不釣り合いで何が起こるのか……全く分からない状態です」

「そんな」

「ただ、それは、我々の予想です。どうなるかは神のみぞ知る……そう思います。……ただ、覚悟だけはしておいてください」

「……はい」

こんなやり取りがあった。

原因不明の発達。何が起こるか分からない。だけど

「だけど、俺たちのこどもたちだろ？桃子さん」

「当り前じゃない、土郎さん」

出産予定日の何日か前、そう伝えられた日の夜。
俺たちは決意した。どんな形で生まれようが、どんな病気を持っていようが、どんな異常を持っていようが・・・
俺たちのこともだ。誰が、何と言おうと、それは。それだけは・・・
絶対に変わらない。

「生まれましたよ！」
「本当ですか!？」

分娩室前で待っていたら、看護師が飛び出してきた。
そして、言われた瞬間、心配と嬉しさと、よく頑張ってくれたという気がどんどん溢れていった。

すぐに全身消毒をし、服装を菌が移らないような物に変えていく。

「おぎゃあおぎゃあ！」

二人とも、元気に泣いている。
気付いたら俺は涙を流していた。

「ふふ・・・元気に生まれましたよ？ 土郎さん」

「ああ・・・ああ！ ああ！ 本当に、良く頑張った！ 桃子さん！」

看護師が赤ちゃんを差しだし

「元気な赤ん坊ですよ？ あなたの腕で、確りと抱いてください」

震える手、泣いている赤ん坊。 そっと、そっと・・・けれど確りと腕に抱く。

「おぎゃあ！ おぎゃあ！」

「その子が、ちよつと頭が発達しちゃった子ですって。 ふふ・・・
元気でよかつたわ」

「ああ・・・大事な・・・俺たちの子だ・・・」

「あらあら、土郎さん？ この子も忘れちゃだめですよ？」

「ああ！ そうだな！・・・そ・・・うだ・・・な」

頬に流れる涙。小さな命。けれど、確りとその息吹を感じれる。

「ありがとう……！生まれてきて……ありがとう！」

いつか、俺たちの腕から飛び立ってしまうだろう雛鳥。

けれど、飛び立っていくまで、思いつきり笑いあおう、泣きあおう、幸せを感じあおう

俺は涙で視界がぼやけながら腕の中の命を感じ、そう、誓った。

「士郎さん、士郎さん」

「ど、どうした？桃子さん」

「この子たちに、名前を……名前を付けてあげましょう」

「ああ……そうだな。じゃあ……」

「お姉ちゃんの方を「このか」妹の方を「なのは」という名前にしたんだ。

「このか」の意味は、名前を漢字にすると「好花」それは、どんな花にも花言葉があるよう、人それぞれ個性がある。

そんな、個性がある人たちを、分け隔てなく、好意をもって接して、包み込んで欲しい・・・そう願い、名付けた。」

確かに、父の怪我のおかげで、ここが現実と悟った。でも、やっぱり、まだ縋っていたのだ・・・。「高町　なのは」という存在に自分なら、どうにか行くだろう・・・そう考えてた。いや、考えてしまっていた。

でもそれは、独りよがり過ぎなかった。所詮一人でできる事なんて・・・たいしたことでは無かった。

「なあ、なのは・・・何か悩んでいるんだったら、俺に相談してみなさい。桃子さんに相談してみなさい・・・家族に相談してみなさい」

一歩。漸く、一歩を踏み出せそうだ。

俺は感謝の涙と後悔の涙。感情がごちゃ混ぜになりながら、ずっと謝り続けた。

家族をリビングに集め、俺の真実を話した。

前世があった事、そこでは普通に学生として過ごしてきた事

そして・・・死んでここへ来た事。（カミサマと能力以外）

黙って聞いてくれた。ただ、魔法の事は話さなかった。

魔法の事やこれからの事件の事は、終わってから話そうと思っていたる。

それは、危険だからだ。俺たちが関わっていたら心配して手を貸そうとしてしまうかもしれない。

いくら彼らが強くても、空を高速で飛べる魔導師には流石に手が出せないだろう。

さらに他の何か事件が起きないとも限らない。その時、家族に何かあったら、悔むに悔みきれない。

だから、そこだけは伏せておく。いつか話そうと決意しながら。

話し終わり、このか姉も話す。

自身の事情を、ただし、魔法関連の話は有耶無耶にして。

静寂が訪れる。

パァン！パァン！

頬がぶたれる音が二つ。

「正直・・・信じられん。だが、なのはもこのかも何処か違って
いた。それだけは、分かる」

目を見て、真剣に聞く

「それに、なのはは、最初から何処か大人びていた面も・・・あつ
た。それは俺たち、家族全員が認識している」

・・・

「最初は、生まれる前に、脳が異常に発達している。これに関係が
あったかと思つた・・・だが、お前が原因だと俺は確信した」

痛む心。だけど目は逸らさない

「それに、このか。急に変わったお前は、正直、別人かと思つた」

辛辣に告げる

「俺の娘は何処へ行つたと思つた。だが、この一年接してみて、確

かにお前は 高町 このか だ」

認められたのかと思ったこのか姉は目から涙が零れた。

「そして、なのは・・・風呂場でも言っただろう・・・確かに、別人が俺たちの子に入ってきたのかもしれない。

だが、それでも、俺たちのこどもだ。俺はお前しか「高町 なのは」という人物は・・・知らない」

え・・・？

「どんなになっても、お前たちは俺たちのこどもで、家族だ。異論は・・・認めない」

「ええ、それに、結構前から、あなた達について話し合っていたの」

「うん。二人とも大人びているからね。二人が寝たら、こっそり起きて話しあっていたんだ」

「普通の子供じゃない。そんな事、見ればすぐわかる」

皆が話す。確かにいつも疲れて早く寝ていたのだけど、そんな事していたなんて。

「それで、何か隠しているのでは？と話し合った結果そうなり、話すまで待とうと家族全員で決めた」

「そして、話してくれた。お母さんも正直・・・信じられない。けれど、あなた達が嘘を言っているようにも見えない」

「私も、信じられない。けれど、嘘をついているように見えない」

「俺も同じだ」

「それに、負い目もあったんだ。事故の事で構ってやれなくてな」

「そうね、いくら精神が年を重ねていても、やっぱりあなた達はまだ、こどもだわ」

皆・・・

「だから、これから作っていこう。いや、これからも作っていこう。家族との思い出を」

「うん。でも、まだ理解できない所があるかもしれないけど・・・これから分かり合えば大丈夫よ」

「時間だけは、まだまだある」

「そうそう」

「」「」「これからも、よろしくね(な)?」「このか」「なのは」「」「」

皆が笑いかける。内心は複雑だろう。話し合いでぶつかった事もあったのだろう。

だが、それでも、認めてくれた。俺は・・・「高町 なのは」として、生まれてきて良かった。

心から、そう思っている。

「ありがとうございます！これからも宜しくお願いします！」

声を揃えて感謝をする。この言葉だけじゃ足りないがそれは、これから返していこうと思う。だが正直、これからどうなるかわからない。

でも、この家族となら、うまく行けそうだと……そう、思った。

それから、色々話していた。

特に元男という事も勢いで言ってしまった、母は

「まあまあ、でも、かわいかったわよ？」

と、広い心で許してくれたが……

「なるほどねえ……だから、お風呂の時ちよっかい出してきたんだ……ねえ？なの？」

……言わない方が良かったか？

まあでも、これでいいのだと思う。このまま話していなかったら、こんなに笑えなかったのだと思う。

おっと、このか姉にも、二人っきりの時、疑われていた自身の能力も全部話した。

何故話さなかったのか、それはやはり「怖い」に帰結する。

空間を形成したり、コピーし貯蔵する力、空間を裂く武器。異端だ。非常に異端だ。

宝具は絶対に来るべき時以外は使わないでね。と、後で色々聞かせてねと言われた。

固有結界のほうは、実感が無いのか、へへ凄いな。の一言。

く、空間を形成するんだぞ！？と言っても、今それをやってもたぶん、木刀一本しかない。

一体、俺の苦悩はなんだったんだろう。まあ、実際やってみろって言われなかったのは幸いだけど。

管理局に確実に観測される。それはいただけない。まあ、乖離剣を彼らが扱いきれるとは思わないが。

だが俺は、逮捕されそうだな・・・うん。

「確かに、隠すのは分からなくはないけど・・・わたしは、全部話したのだし、フェアじゃないよね？」

「ごめんなさい、このか姉」

「ふふ・・・大丈夫。全部話してくれたし、これからみっちり扱くから」

「・・・分かりました、よろしく願います」

ふふふ・・・何がいいかなあ・・・と良い笑顔でメニューを組むこ

のか姉は

どこか、母に似ていると思った。

「そついえば、姉さん」

「ん？何？」

「なんで、姉さんから私たちの事情を切り出さなかったの？」

「それはね、なのはが迷ってたからだよ。それに、時間もまだあるし、どうしても切り出せなかったら、わたしが切り出してたよ」

なるほどね。俺が悩んでいるのを見抜いていたか・・・流石です。

「改めて、これからもよろしくね？なのは」

「こちらこそ、よろしくお願いします。姉さん」

も〜堅苦しいよ？と言っているが、礼儀だ。

こうして、漸く決意できた。俺は、この家族の一員としての「高町なのは」として生きていく事を。

名前（後書き）

誤字脱字等御座いましたら、ご指摘をお願いします。

ひととき

自身の事を打ち明けて早、四か月。
もう、すっかり冷え込んできたが、冬にはまだ、いささか早い時期。
まだ、少しぎくしゃくしちゃう時もあるが・・・概ね問題無いと言
える。

「いってきます」

「いってきますーす！」

「じゃあ、いってくるよ」

「お留守番お願いね？二人とも」

玄関まで見送り

「」「いってらっしゃい」「」

送り出す。こんな日々が続いている。

あれから、何が変わった？と言われれば・・・そんなに大差
ない。

毎日朝の挨拶から見送り、お休みまで、普通に過ごしている。
変わった事は、勉強を見る時が時たまあるくらいだが・・・

「ねえ二人とも」

「何？（どうしたの？）」「

「この問題教えて」

そういつて、問題集を見せてくる美由希姉。

高校生だし、問題は無いな。と、思い、覗いてみるが・・・
・・・全く分からない。このか姉なんか中卒レベルだ。分かるはず無い。

「もう憶えてないよ、美由希姉」

「う、うん」

強がるなよ、このか姉。冷や汗垂れてるぞ。

「ええ、ホントにわからないの？」

「見た事は・・・ある。だけどすっかり、やり方なんて忘れたよ」
「う、うん」

それしか言っただけ、このか姉。

「そんなもんなの？」

「そんなもん」

おい、ハモれないだろ。《冷や汗垂れてんぞ》

《明日は少しきつめにしようか》

思考がただ漏れしていたらしい。見れば笑顔が眩しい。
どうやら、明日の朝日が最後になりそうだ。

そんな毎日を過ごしていた。

ある日。

「あゝ・・・暇」

そう、学校へ行ってもいないし、もう食事も食べ終わり、後片づけをし、昼休憩。

外出許可が出たので、外をぶらつけばいいのだが・・・お小遣いも無いし、今更公園で遊ぶような精神でもない。

外で魔法の訓練とかよくやるが、ぶっちゃけ庭で事足りる。

なので、この昼休憩を何に使おうか、そう迷ってテレビを見ればこのか姉が昼ドラを、お菓子を片手に、ソファにどっぷり腰を掛けて見ている。

その辺にいる主婦と大差ない。・・・いや、いいと思うよ？うん。

「姉さん」

「何？なのは」

「面白い？」

「うん」

今やっているドラマは、複雑な家庭環境の中、姉を愛してしまった妹が主人公の物語だ。

「……見ていて生々しい……普通に、こどもはみちやいけないだろう。」

「……ん？なんかデジャブを感じ……るわけないか！ははははは！」

「ええ……ここで終わっちゃうの？」

どうやら、終わったらしい。このか姉はかなりの御不満な様子だ。

次回予告が流れて、CMが流れ始める。……ああ……ネット欲しい。

そう、思って、チャンネルを切り換えて、少しでも望みを掴もうとしたら

・ とある美術展の出展のCMが流れた。煌びやかな物が映し出され……

各地の伝説展、国宝も来るよ」

ドン。とテーマが映し出された。

「うそ・・・だろ・・・？」

「どしたの？」

「いや・・・これ・・・」

「ん？」

映し出される、各々の伝説の由来品。

テレビ越しじゃ解らないので、歯がゆいが、武器もちよくちよく映し出されている。

「・・・もしかして・・・なのは魔法の？」

「うん・・・これ行けば、木刀から卒業できるかも・・・」

期待は大きい。宝具は無い確率がでかい。だが、これだけ集まってるんだ・・・

なかには本物もある。いや、ありますように・・・

そうそう、UBWになぜ宝具や、その他の武器が無いか、推測してみた。

この能力はカミサマから貰った物、しかし、その時どのような形で貰ったか

それは「能力」として貰った。本来「宝具」扱いの所をだ。

しかし、それだと普通の名剣やらが無いのはおかしい。

そこにも、秘密が隠されていた。確かに、あの時は「アーチャーの魔術そのものだ」

と思っていた。しかし、蓋を開けてみれば確かにそのものだった・・・
・ただし「経験」を除いて。

確かに、本能、魂レベルで魔術のやり方は「理解」できる。が、「使いこなせる」という訳じゃない。

つまり、完璧な白紙の状態だったというわけだ。であるから、UBWに全く剣が登録されていないのだと推測した。宝具として貰っている、乖離剣はたぶん、真名解放は・・・カノウダトオモウ。ウン。

・・・世の中、中々うまく回らない。なので、なから宝具や剣の投影はあきらめて、高そうな包丁が売っている店に行つて解析して、投影で「MY包丁」として活用するしか道は無い・・・と思っていた時期だ。

その時期にこの一報。興奮しないわけが無い。

「っと、メモして、今日相談してみよう」

「そっだね」

興奮する自身を押さえながら、メモを丁寧にとつていった。

「各地の伝説展？」

「うん」

夕食時、家族がそろっている時に、今日のCMの事・・・伝えたい

事を話した。

因みに、今日の夕食はみんな大好き花丸ハンバーグだ。

「伝説ねえ・・・なのははそういうのに興味あるのか？」

「うん。活躍した人の話を聞くのは好きだし、価値がある品を見るのも好きだよ」

「へえ・・・結構、オカルト好きなんだね」

「そうだね、遺跡とか歴史的な物とか、結構興味あるんだ」

話の感じ的に、美由希姉はそんなに興味無いらしい。

まあ、どんな話も結構胡散臭いのばかりだし、気持ち的にわからなくても無い。

が、この機会を逃せば次にならなくなるのかわからない。
自身の能力強化にもなる。・・・流石に宝具クラスだと無暗に練習
ができないが・・・

「ふむ・・・その美術展は何処でやっているんだい？」

「隣の駅から、わりと近い美術館に出展してきているらしいよ」

「何時出展されるんだい？」

「来週の土曜日からいんだけど・・・」

「その日は、仕事だなあ・・・」

そう、それは知っている。別に次の日曜でもいいのだが

土日は翠屋のかきいれ時だ。父と母が連れていくのは無理だ。

自身一人でも行けるが・・・館内で警備さんに見つかったら即、迷子アナウンスが入ってしまうし

小さい子どもを一人で行かせるのは、両親の周りの評価を下げてしまふ恐れがある。
それは、避けなければならない。では、どうしようか・・・と、悩んでいたら

「俺と桃子さんは無理だけど、恭也か、美由希に連れて行ってもらえばいいだろう」

「私は・・・ちょっと遠慮しよっかな」

なるほど・・・ならば

「恭也兄。連れて行ってくだ」いいぞ」「さ・・・本当に!？」

「ああ、いいぞ」

「ありがとうー!」

そう言って、苦手なセロリを恭也兄の皿に移す。

「おい」

何か言ってきたが問題n

「連れていけないぞ」

「すみませんでした。調子のってました」

「よろしい」

どうやらプレゼントをお気に召さなかったらしい。非常に残念だ。

「このかはどうする？」

「ん〜・・・わたしは、留守番してるね」

「ふふ・・・お願いね？」

うん!というこのか姉を尻目に、当日の計画を脳内で立てていくのであった。

「いつてきまーす!」

「留守番頼んだぞ。このか」

「いつてらっしゃい。気を付けてね？」

はーい!と返事をし、恭也兄と玄関を出た。

隣町までは1時間もかからない。駅まで行き、電車に乗れば到着だ。

「さて、ここから確か30分位の場所にあるんだよね？」

「うん。道も憶えているし、大丈夫」

そう、この日までCMで何回も流れていたのだ。憶えられないはずが無い。

「それに、メモもきちっと取っているし、大丈夫！」

そして、この嚴重さだ。それに万が一でも、タクシーを拾えばどうにかなる。

美術館に着いて、まずパンフレットを見る。何処に、どの伝説の由来品があるか確認するためだ。

見ると、ケルト神話から始まり、果ては八岐大蛇まである。

・・・ただ、殆どが文献とか、レプリカとかは、言うまでも無いが、それでもいいかなと考えていた。

何故ならば、個人的にこういうのは大好きだからだ。これに尽きる。レプリカでも木刀よりはかっこいいし・・・

「ふむ・・・色々あるなあ・・・どれから周ろうか？」

「んゝ・・・まずは、ケルト神話コーナーから周りたいな」

「わかった」

そう言葉を交わし、美術品を見ていった。

・・・煌びやかなものと、何か古い文献とか、そんなものしか無い・

・
「これが、かのアーサー王が使っていたとされるエクスカリバー」
とか・・・おいおい。

まあその下に、記録から再現したもの、と書かれているし、仕方が無いか。

能力方面の強化は無理かな・・・と思いつつ、普通に面白くて、ついつい細かい所まで目が移ってしまう。
あ、ゲイ・ボルクだ。勿論レプリカ。

「こういうのも結構面白いな」
「うん」

偽物がほとんどなのであれだが、これはこれでいいものだ。
何と言うか・・・男心をくすぐる。神秘はこの世界でも素晴らしい。

「それじゃあ・・・国宝見に行かない？」
「ああ、いいぞ」
「ありがとう」

パンフレットに載っている国宝。これは俺が転生する前にもあった今現在で手に入れられる。というより、自身の最大の手札になりえるものだ。

真っ先に解析しに行こうかと思ったけど、気持ち的に後回しにしたくなったのだ。

「これが・・・天下五剣の一つの刀剣か・・・・・・・・」

今、目の前にあるのは「童子切」80cmある太刀は源頼光が所有し、大江山の酒吞童子という鬼を退治した時に使用されたという。なんだろう、神々しいというか他を圧倒する存在感。

「美しいな」

「うん」

まあ、解析が無ければぶっちゃけると、そこまでわからないというのが本音だが美しいというのは変わらない。

おっと、解析解析つと。・・・ふはははは！これでかつる！・・・・・・ん？非殺傷設定・・・・あれ？・・・・

「・・・・しまった」

「どうした？」

「ううん・・・なんでもないよ」

苦笑いしながら誤魔化す。窺うようにこちらを見ているが、これ以上詮索は無かった。

さりげない優しさが恭也兄の良い所だと思ってる。

しかし、実際問題どうしたものか・・・原作開始までまだ時間があるが、この問題は解決できないだろう。

でも自身の魔力で発動するし、デバイスがあれば解決するのかな？
うーん・・・

あとちよこちよこ周っていたら、何か「日本号」っていう槍が飾っ

てあった。日本号って地球号かよ（笑）

でも、何故か解析に時間がかかった。なんでだろ？と思ったら天下三名槍の内の一つらしい。

・・・正直、ネタかと思ってた。

「ほとんど見て回ったな」

「そうだね」

「どうした、まだ悩んでるのか？」

うつんと首を振りながら否定する。悩みといえば悩みんだけど、これはこのか姉に聞いた方がいいかな。

「今日はありがとう恭也兄」

満開の笑みでお礼を言う。だが俺にはニコポは備わって無かったよ
うだ

「俺も楽しかったし、こちらこそだ」

真顔で返された。まあ幼女に顔を赤くしながら話したら傍目に見て
変態だしな

「じゃ、帰ろうか」

「うん」

「ゲイ・ボルク」・・・レプリカならあったから振り回したいなあ
・・・と

新しい武器に思いを馳せながら俺たちは美術館を後にした。

ひととき（後書き）

誤字脱字等ありましたら、指摘をお願いします。

学校

冬も超え、とうとう入学の季節がやって来たぜ！

両親からリビングに呼び出されて、近辺の小学校の資料がテーブルの上に広がっていた。

「二人はどの学校がいいと思うんだ？」

向かい合っている両親はニコニコしながらこちらを見ている。

隣のこのか姉は色々眺めている。まあ俺はこのか姉に任せようかな
と思っっている。

たぶん私立聖祥大付属小学校に決定すると思ったからだ。

「二人は、事情が事情だし聖祥でいいんじゃないかしら？」

「でも、私立だし負担掛けちゃうんじゃない？」

「その辺の事は心配するな」

一応お金の所を突っ込んだけど……流石だぜ……言う事
ねえ……ほれちゃいそうだぜ。

「わたしは・・・聖祥がいいな」

控えめに言うこのか姉、やはり親友二人が通う学校だし気持ちは分らないでもない。
それに、なるべく原作に沿ってもらえればこちらも都合がいい。もうつろ覚えだけ。

「なのははどうだ？」

「私も姉さんと一緒がいい」

「ふふ、決まりね！」

あっという間に決まってしまった。

両親は書類を整理して、記入事項を書いている。笑顔が眩しい

「ふふ・・・このかとなのはの制服姿」

「ああ・・・撮影会だな」

・・・今からポーズでも考えておこうかな。

「ねえ姉さん」

「ん？どうしたの？」

「ちよっと聞きたい事があって」

次の日、家族がそれぞれのお勤めに行ってる最中、美術館で疑問に思った事を聞いてみることにした。

そう、非殺傷設定の事だ。俺の魔法で非殺傷設定が可能なのか？

「非殺傷って私の魔法でもできるの？」

「うん・・・非殺傷設定は、魔法の術式で組み込んでるから、なのは魔法だとちよっと難しいかな」

「マジですか」

「マジです」

「まずい・・・なら無暗に壊れた幻想はできない。」

「誤って殺したなんて、洒落にらん。くそ・・・できるかなと思っただけ、無理だったか。」

「でも、なのはの魔力で発動するわけだし、その魔法を研究すれば

できるかもね」

フォローをしてくれるけど、あれ？管理局に入れと？

「ま、まあ自分でもどうにかできないか頑張ってみるよ」

「うん。さ、休憩終わりだよ」

「ハイ」

さて、地獄を見に行きますか。

「高町 なのは と言います。好きな物はカフェオレで、嫌いな食べ物
はレバーです。宜しくお願いします」

テンプレートな自己紹介を済ましパチパチと拍手に包まれる。
自分の席に着席する。

ふうーと心の中で溜め息をして、全員の自己紹介が終わるのを待つ

中、俺はきよろきよろと辺りを見回す。

入学式の前日に俺とこのか姉の撮影会が行われた。ポーズを考えておいたが

直ぐにネタ切れしてしまった。が、このか姉は慣れているようにポーズを繰り出せていた。

流石アイドルだ。この手の仕事にも引つ張りだこだったのに違いな

い。

このか姉曰く慣れたそうだ。いや、無理だろ。常識的に考えて。

その後入学式で名前が呼ばれる際、アリサ、すずかの名前がきつちり出ていたのは確認した。

しかし、流石私立というのか礼儀正しい子たちだ。俺何か小学生の時はこんなにじっとしていられなかったぞ

入学式が終わり、一人ひとり指定された教室へ向かっていく。

俺がなのはだからいるかなと、思いつつ教室をくぐったが・・・

(いねえ)

そう、いないのだ、あの二人が。自己紹介が終わった後も、再度見回したがやはりいない。

大方このか姉のクラスだろうと見当を付けた。

連絡事項が終わり、入学式が終了した。このか姉のクラスは一足早く終わったようので校門で待っているそうだ。

・・・こういつつ時に念話って便利だよな。

「なのはやっていけそうか？」

「当たり前だよ、父さん」

「そうか」

笑顔で受け答え、校門に行く前にそんな事を聞かれたがまあ何とかなるだろうと思った。

これからもそうだといいなあ・・・無理だけど。

「二人ともこっちこっち」

手を振る女神たち。ふつくしい・・・夕日と相まって一層美しく見える。

「またせたね」

「いいえ」

すぐに展開される桃色空間。・・・正直憧れる。しかし女性の体になったからなあ・・・俺は男に恋を・・・
待て待て！それは無理だ！いくら体が女性でもそれは・・・でも、常識的に考えて女性に恋心を持つのは・・・

「なのは、どうしたの？」

心配そうにこちらを覗きこむこのか姉。

・・・TSして、ガールズラブとか・・・・・・・・夢のまた夢だな。

「ううん・・・なんでもない」

「そう？」

「うん」

返事を聞いてこのか姉は納得したのか、道を歩いていく。

なるようになるか・・・そう結論つけて家への向けて足を進める。

明日から、学校だ。

「なのはご飯食べよ？」

「姉さん。少し待ってて」

「うん！」

一週間くらい経った日の学校の昼休憩。まだ校内の地図が頭に入っていないが、このか姉は思い出すように、懐かしむように校内を見てる。

・・・このか姉に任せよう。ああ、それと案の定「アリサ」「すずか」の二人はこのか姉のクラスにいるようだ。

見せられた連絡網で二人の名前があつたし、間違いないだろう。

「どこで食べるの？」

「ん〜中庭かな？天気もいいしね」

「わかった」

庭で弁当とか・・・前世では考えられないな。

二人で廊下を歩く。やはり双子だからであろうか、注目を集めている。

因みに髪型は原作なのはと同じだ・・・二人ともな！ふははは！見分けがつかないだろう！

「にやにやしてどうしたの?」
「な、なんでもないよ」

顔に出たか・・・気をつけねば。・・・見分けつけるよ
うにしようかな。
いや、母さんの笑みに勝てないからこの髪型なんだけどね。

玄関をくぐり中庭へ。太陽の光がぼかぼかして気持ちいい
外にでてうーんと背伸びをして、先をいくこのか姉を追いかける。

「いただきます」

適当なベンチに座りお弁当を開いて合掌。

今日の弁当の中身はだし巻き卵にタコさんウィンナー、ミックスピ
ーンズにサクランボ
色とりどりの弁当にサンドウィッチもあり中々ボリュームがある。

まだ弁当を作る挑戦はしていないけど、近々挑戦しようかなと密か

に闘志を燃やしている。

パクパク弁当を食べてると何か聞こえてくる。このか姉も聞こえたのだろうか、弁当を食べる手が止まっている。

日常的な音だったら気にも留めないが、どうやら非日常の音のようだ。

「・・・えして！・・・してよ！」

「う・・・する・・・！」

何を言っているのか分からないが、このツンデレボイスは・・・と思っていたらこのか姉が駆け出した。

なるほど・・・こんな早くに知り合っていたのか。そう思って、自分とこのか姉の弁当を片づけて追いかけた。

ちらつと見たら遠目に、はっきりと見える位置にいた。・・・

千里眼乙

「痛いでしょう？でも、大切なものを取られた人の心はもっと痛いんだよ」

少し駆け足で追いかけたらそんな言葉が聞こえてきた。すずかはお

ろおろしている。

改めると、小学1年が言う台詞じゃないよね。前世の俺なんか初日は寂しくて泣いてた記憶がある。

……何故かこういう事って記憶に残ってるよね。

「あ、アンタは同じクラスの……!？」

こっち見て驚いてる。双子ってそんなに珍しい……のだろうなあ。一卵性で喋らなければ殆ど見分けがつかないもんね。でもよく見て、眼が少し俺の方がやる気なさげでしょ？
ここで見分けがつく。

「そ、そんなことより何すんのよ!？」

「そっちこそ何してるの？」

「わ、私はただ……」

まあ、察しはつく。友達になりたかったのだろうが、たぶん接し方が分からなかったのだと思う。

と思っていると、何かヒートアップしている。おいおい！小学生の喧嘩じゃねえ！何だあのラッシュの応酬は!？

……何て事は無く、殴り合いにはなっているが、うん。

落ち着くまで待つかと思っていると

「二人ともやめて!!」

今までおろおろしていたはずかの一喝で止まる二人、そしてすずかの方を見る。

一粒の涙が流れる。流石にやり過ぎたと思ったのだろうか、バツが悪そうにするアリサ。あとこのか姉も。

・・・あれ？俺何しに来たんだこれ？突っ立ってるだけじゃね？いや、下手すると友達になれなかつたかもしれないじゃないかだからこれでいいんだ。・・・待て待てそれでいいのか？と、自問自答していたら何だか丸く収まったみたい。

あとはタイミングを合わせて混ぜればいいかな？・・・何か情けねえ。

結果から言うと、仲良し四人組になった。あ後はタイミングを合わせて自己紹介。

そして俺達双子についての見分け方で話が盛り上がっていき、そのまま帰り一緒に帰ろうと約束し友達へという流れだった。

俺の小学生生活は中々の滑り出しだ。これで俺がクラスでハブられなければ万事オッケー。

基本スタンスは、誰とでも話すけど特定の友達を持たない感じで行こう。・・・他に転生者がいなければいいんだけど・・・大丈夫かな。

学校から帰って鍛錬し、夕食をとりベットへ。因みにこのか姉と同じベットです。このか姉が寝ている横で布団をかぶりながら一人考える。

・・・原作開始まであと数年になってしまった。時間が過ぎるのは早いなあ・・・まあそんなことより、現状の確認を今のうちにしておこう。

まずは、自身の能力だけこのままだと全く使えない。理由はいくつかあるけど最大が遠距離攻撃ができないという事だ。

ミッドチルダの魔法を憶えているが大体が補助で攻撃的なものは教わってもらっていない。お気づきだと思うが・・・弓の才能もらいながら

全く鍛えてないんだ・・・すまない。自己流でやるわけにもいかなないが、小学生になったのだから弓道教室があったら是非通ってみたいと思っている。

そして最近気付いたのだけれど「解析」の力で魔法の術式を見れて尚且つ「何故か」一発で憶えられる。

例えば仮に、このか姉が「スターライトブレイカー」を放ったとしてそれを解析し、術式が理解でき憶えられるという事だ。

これについては良く分かっていないが、便利なので別にいいやと思っっている。

そのことを話してみるけど、このか姉も良く分らないらしいが便利だから新しい魔法を教えるときには使つてというお達しが来た。

ただ、憶えるのと使いこなすは全く別物なので今はまだ補助魔法に専念している。魔法の才能のおかげか他の人より幾分覚えが早いらしい。

スキルの事は訓練の時に使っていて千里眼は前使ったときより持続時間は伸びている・・・が、一分も持たないので最終手段だ。

でも、直感Aがあるから大抵の攻撃は避けれる。・・・まあ体と魔法のコントロールが追いつかないんだけどね。

ただ、千里眼と合わせると正確に数秒先の未来が読める・・・というより「360度視える」というチートが発覚している。その場でガッツポーズをしたほどだ。

しかし、カミサマからもらった才能はすいすい上達するかな？と思っていたけど、上達が早いのは分かるけど一流になるにはそれなりの時間が必要かな・・・と考えている。

最悪弓を捨てようかなとも思っている。まあ兎にも角にも今の目標はヴォルケンリッターから一人で逃げ切れる位の力が欲しい。

蒐集されると俺の魔術がどうなるかが全く予想がつかないからだ。今の所、魔法と魔術を混ぜて使うのは魔術の術式が判明していないので、できないと思っている。

・・・たぶん。どこかに穴がありそうで怖いお。

張られた結界はどうするの？と思われるだろうが、安心してくれ。

前に博物館で解析して丘にぶっさした天下五剣の一つ。「童子切」

この刀の概念は「魔力も切り裂ける」という某槍とほとんど同じだ。まああの酒吞童子を切ったのだ。相応しい能力だと思っている。ただ、何処まで切り裂けるかわからない。だが、これだけは言える。

魔王の砲撃は無理かな・・・と。

日本号の方は、とにかく硬い。持ち主の危機を救ったという逸話からか、硬いです。・・・うん。それだけなんだ。でもカツコいいからオツケー。

強化すれば振り回せなくはないので、同調しながら槍は練習してい

る。いつかゲイ・ボルクをカッコ良く振り回したいぜ。・・・レプ
リ力だけど。

あゝ・・・原作通りにはもう行かないな・・・このか姉がどんな行
動するかなあ・・・と、考えていたらいつの間にか眠ってしまった
のであった。

学校（後書き）

誤字脱字等ありましたら指摘お願いします。

直前（前書き）

年末年始は忙しかった…まだまだ忙しくなるよおおおお！

直前

夜の海。そこは穏やかな波と静けさが場を支配していた。

そんな夜遅くの時間に、何か弾ける音がした。いや、弾けると言う生易しい音ではない・・・「爆音」

この場に似つかわしく無い音が響き渡っていた。音の出所を見ると、真っ赤な軌跡と金色の軌跡が、夜の海で踊っていた。

「私の宝具は108個ある」

黒衣の少女に真っ赤な「何か」を纏っている少女が距離を空けてそう投げかける。だが、宝具とは何を意味するのか・・・どうやら黒衣の少女はわかっていないようだ。

それもそうだろう、その少女にしてみれば「宝具」何て言葉は聞いたことが無い。事実、油断なく構えながらも怪訝な顔をしている。

だが、それも一瞬で直ぐに顔を引き締め、相手の出方を窺いながら先の言葉の意味を質問した。

「ほづぐ・・・?」

にやりと、少女に似つかわしく無い程唇を釣り上げ、まるでよくぞ聞いてくれたと思うようなオーバーに両手を広げ

「そう、宝具だ。宝具とは伝説や……いや、君に話しても意味のない事だったな」

残念そうに顔を歪ませて俯き頭を横に振る。そこで大きな隙ができた。そして当然

「ハア！」

瞬時に近づき一閃。その軌跡は容赦無く赤い少女を真っ二つにするかと思っただが……
そんな黒衣の少女の行動を予測していたのだろう。最低限の動きでかわし、距離を置く。

「おいおい……ひどいじゃないか」

そんな台詞を言っておきながら、微塵もそんな事は思って無い。何

故なら彼女は「視えている」からだ。
だが、そんな事は知るはずが無い黒衣の少女は避けられた事に驚いた。完全に隙を突いたつもりだったし、自身の高速移動魔法で一気に距離を縮めての一閃。
単純な攻撃だが、彼女にはそれが通る自信があった。何故ならば自身の武器が「速さ」だったからだ。しかし、現実はあっさりと避けられた。

「ふふふ……その魔法便利だね……私に教えてよ？」

返答は無い。今の黒衣の少女の頭の中には、いかに相手を倒すか・
・それだけで思考の大半を奪われており、残った思考で敵の出方を窺っているからだ。
数秒か、数分か……静寂の時が過ぎていく中、突如真つ赤な魔法陣が広がり、中心にいた少女が宣告する

「次は……私の番だね」

一瞬にして展開される魔力弾。空が血の色に覆われる……もはや数えるのが馬鹿らしい位の数だ。
しかし、黒衣の少女は数より魔法自体に驚いていた。

(フォトンランサーファランクスシフト!?)

驚くのも無理が無い、自身が誇る上位クラスの攻撃魔法が今目の前に広がっているのだ。

クロスレンジで悉く避けられ、中、遠距離も自身と同レベル、いやそれ以上かもしれない。だけど、引けない。

(母さん……!!)

待っている人がいるのだ。少女は覚悟を決めて敵を見る。

「さあ……私に君の踊りを見せてくれ……」

その言葉が合図に、空一面に覆い尽くされた赤い魔力弾が一斉に黒衣の少女に襲いかかった。

少女は冷静に、的確に、一瞬で判断し、回避したり当たると思った魔力弾を斬っていき敵に向かって行く。

「後ろが御留守だよ?」

そんな言葉が聞こえてはつとし、背後を視界の端で見る。が、通り過ぎていく魔力弾しか映っていない。

そしてそれが単純な罠である事に気付いた。が、時すでに遅し。少女の視界いっぱい「何か」が映り、体に巻きついていく。

「こんなもの！」

力を入れたらほとんど抵抗なしにそれは解けそうだったが、その直前に上へ引き上げられる。

上を見れば何も無い、直ぐに解き戦闘態勢を整えようとした瞬間に自身の手足に何か枷が着いた。

「バインド!？」

真っ赤な輪が手首と足首に巻きついていて。何時の間かと思ったが

「君と戦ってる最中さ・・・尤も、戦い始めて直ぐだけどね。何時見破られるか冷や冷やしてたよ」

まるで思考を読んだかのように
口元を歪めて、黒衣の少女を見る。少女は何とか脱出しようともが
くが・・・無駄な事であった。
気付いたら何重にもバンドが巻きつき離れない。それでも少女は
あきらめなかった。

「やっと捕まえたよ・・・ふふふ」

口を歪めて笑いながら近づいて行く。しかし、そこで疑問に思った。
自分の相棒は・・・
そうだ、まだ相棒が残っていたじゃないか！その事実気付き念話
を試みた・・・が

(繋がらない!?)

驚愕しそして絶望が自身の中で広がっていく。

「ふふふ・・・君のペットなら・・・私の姉が今頃ほこぼこ
にしているんじゃないかな？ま、そんな事はどうでもいいけどね」

少女の手が唇に触れる。愛おしそうに唇を撫でる。 ” くやしい！ ”

そう思っているが何もできない。

「ホント・・・良い表情をするね・・・ねえ、私の物にならない？」

「誰が!!」

「そう・・・残念」

がつくりと肩を落とす少女と、毅然な態度を振るう少女。肩を落とした少女がゆっくりと顔を上げてこう囁いた

「なら・・・そのかわいい声で・・・顔で・・・私を楽しませて」

その言葉と同時に魔法陣が展開されゆっくりと、魔力弾が形成されていく。

数は先ほどより少ないが、込めている魔力が多い。しかし、何故かその込めている魔力の多さがまばらだ。その疑問は直ぐに解決した。

「これを当ててもただ痛いだけ・・・直ぐに慣れちゃうかもしれないでしょ？だから考えたの。魔力が少ない方から順に当てていけば・・・」

その言葉でわかった。だけど、絶対に弱さを出さないと決め、キツと睨む。

「本当にいい表情・・・それが苦痛で歪むのを想像するだけで興奮するよ・・・ふふ・・・その表情を私に見せて？」

そして、小さな魔力弾から、特大な魔力弾が自身の周囲に展開され、小さな魔力弾が体を貫いた。

「く・・・！あああああああああああ！」

「ふふ・・・ゆっくり入ってくると痛みが長く続くでしょ？・・・
つて聞こえてないか」

叫ぶ少女、快感に浸る少女。・・・まだ夜は始まったばかり
だった。

「っは!!」

眼が覚めたら見なれた天井。隣にはすやすや眠るこのか姉。

「なんだ・・・夢か」

馬鹿馬鹿しい・・・俺がフェイトに対してあんな優勢に事が運べるわけが無い。

そもそもなんだよ・・・私の宝具は108個あるって・・・一個しか無いよ・・・。

それ以前に、自分の性格がどう考えても違い過ぎだろう。しかし、その夢で興奮したことも事実で・・・

「あゝ・・・何やってんだろ」

まあ、夢だから仕方ないか。と、眠ろうとしたんだけど・・・眠れん。

やばい、隣に寝ているこのか姉が妙に色っぽい・・・いやいやいや！何をしているんだ!？

時計を見るとまだ朝の4時。中途半端に起きてこれから眠るのは無理だなあ・・・と思って、思い切って起きることにした。

(瞑想でもしよ)

ベットの上でこのか姉にぶつからないよう座禅を組み意識を集中する。

・・・別段思う事も無いんだけどね、集中するのは大事よ。と言いつ聞かせるが5分で飽きた。

なら妄想しようと思って、ベットに潜り込んでいかに自分がフアンタジーの世界で活躍するかをテーマに妄想。

妄想に浸っていたら鍛錬の時間となり、このか姉を起して道場へ向かう。

朝食をとっている時にふと思った。今日の夢は何かを伝えようとしていたのではないか？

しかし、思い返してみると全く意図が伝わって来ない。伝わってくるのが俺 t u e e e e とDSな俺。

・・・意味無いな・・・うん。と、自己解決し朝食に専念し、まあいいやと夢を頭の中から追い出して学校へ行った。

早いものでもう原作直前である。といっても後、3か月はある。しかし、このか姉は中々事件の詳しい話を切り出してくれない。まあ忘れるかもしれないから直前まで話さないのかな？と、思っている。・・・こちらから切り出せるわけもないしな。それに、話さなくても別にいいと思っている。

理由は簡単。もう原作通りに行かないと思っているからだ。俺然り、このか姉然り。イレギュラーしかない。

プレシアがもう死んでるかもしれないし、アリシアが生きているかもしれない。ユーノが発掘するとも限らないし、発掘されたものがジュエルシードじゃないかもしれない。

まあ、原作通りでも、流石に細かい場所は違うだろう。・・・ジュエルシードが落ちてくる場所が一緒だと逆に寒気がする。・・・

そこまで決まっていると自分も「何かに従って動いている」「何て言う考えが浮かんでしまう。それが自分の意志だとしても。

まあ、考えても仕方が無いか。とりあえず、自身の平穩のために原作通りの結末を目指したい。

過程はこの際無視・・・したいなあ・・・終わりよければすべてよしだったらいいなあ・・・淡い理想論か。

・・・いつその事介入しないで・・・って無理か。ヴォルケンリッターに確実に襲われるよな。

だったら、少しでも実戦経験を積みたいからこのか姉と一緒に介入だな。うん。

「なのは？」

「何？姉さん」

「ううん、何でもないよ」

「そう？」

下校の途中。声を掛けてきたこのか姉。たぶん、考え事をしていて上の空だったのだろう。

まあ、いつも妄想して上の空だからもう慣れたのだろう。対応がスムーズだけ。・・・正直申し訳ないと思ってる。直す気は無いけど。

「うん。・・・そうそう、あの時はびっくりしたよ」

「あの時って？」

「えっとね、食事中いきなり、弓道教室通いたい、何て言うてくるんだもん」

「ああ、あの時か」

そう、俺は弓の才能を貰っているので、習いたいと思っただけなんだが・・・

「うーん・・・その体格だと弓はきついかもしれないぞ？」

1年前位かな。弓の才能を貰っているのでは是非とも修めておきたい

ので、食事中切り出したんだ。

渋る父。まあ当然の事だ。小学2年で弓はきつい所がある。

子供用の弓矢があればいいのだが、そんなものじゃ意味が無い。そんなちやちなものを投影するなら近づいて斬った方が何倍もまじだ。強化して使えない事は無いのだからが・・・どうなんだろう・・・実際に試した事が無いからわからないな。

まあ今は現実的じゃないな。だいたい、剣もまだまだし、二束の草鞋を履けるほど器用じゃない。

ならば一点集中である程度剣を修めたら弓も鍛えていけばいいかな・・・うん。

ただ、遠距離攻撃は欲しいから今度このか姉に教わろうかなとは思っている。リーチの差はでかい。

牽制にもなるし、攻撃手段の幅が広がるし、良い事づくめじゃないか。

・・・でも、一度やってみたいよな・・・

「I am the born of my sword」

「カラドボルグ！」

・・・イー！めっちゃやりたい！

「無理矢理通したもんね、弓教室に通うことを」

「ま、まあね。ほら、弓道少女って・・・あれ・・・そう、カッコいいじゃん」

「ふん・・・」

その間は何だと問い詰めたいが、墓穴を掘りそうで怖いのであえて

追及しないことに決めた。

そう、俺はあれをやりたいがために無理やり押し通したのだ。まあ交換条件で、常に学年TOP20以内という条件が下されたが問題ない。

授業はハブされないよう真面目に、休み時間中はあまり目立たないが、それなりに存在感をアピールしていく内に

当初学校内で望んだポジションになって、万々歳だ。いや、ホント・
・苦勞しましたよ。

「弓と矢って今作れるの？」

「うん。庭ではれないように毎日練習してるよ」

1年間練習してようやく2km先の木の狙った枝に中てることが出るようになったんだ。

もちろん身体、弓を強化しないと飛距離があれなので、ちゃんと強化してこの結果だ。

当たった時は感動したね。今度は落ち葉に中てよう。・・・俺カッコいい……………

「ふ〜ん、じゃあ練習してる弓ってなのは魔法で作ったものだったんだ」

「他に何があるの？」

「持って帰ってきたのかなと思ってた」

「それはない」

海鳴市から二駅、遠見市を過ぎた駅にある弓道教室に週三で通っているのだが

なかなか大きな道場で、個人で弓を保管できるスペースが有るのだ。いつもはそこに保管している。

持ち運ぶの面倒だし、ぶつちゃけ一度見て講師の使っている弓を登録して、動きを投影すればオツケーと思ってたけど

それはそれ、面白ければオールオツケー。というより、講師の実力をとうに越してるのだが・・・たぶん。

「……やっぱり、気にしてるの？」

突然そう呟くこのか姉。

「何のこと？」

「私が前に言ったこと」

「言った事・・・ああ、この近辺で事件があることね」

「うん」

思い返してみると・・・確かに言っている。
お互いに事情を話した時だ。

「・・・まあ気にしてないと言ったらウソになるけど、そんなに気にしてないよ」

「でも、剣に弓に魔法に・・・何か急いでない？」

「そうかな？」

「うん」

うーん・・・自身ではそこまで急いでは思っていないかったけど他の人から見るとそう見えていたのか・・・直す気はないけど。だって、才能あるとどんどん上達するんだもん。凄く楽しいんだ！

「・・・絶対に、間違えないでね・・・」

「？何か言った？」

「・・・ううん、何でもないよ」

笑顔で答えるこのか姉、その笑顔には何処か影が下りているように感じた。

直前（後書き）

誤字脱字等ありましたらご指摘ください。

原作

黒い大きな影を、金色の髪の人が追いかけている。

緑色の魔法陣を展開して影と戦っている。でも、緑色の方は、あと一步の所で力尽きた。

「誰か……！この声が聞こえている誰か！僕に魔法の力を……！」

悲痛な叫びが響き渡った。

確かこんな感じな夢だった。うん。

もうつる覚えなんだよ、寝て起きた時って夢の内容思い出せないんだよ。

でも、もう原作開始時期かぁ……9年ってあつという間だね。

さて、今日も一日頑張りますか！………適当に

「はあ！」

「せい！」

何時もの朝の鍛錬で俺は恭也兄と打ち合っている。全てにおいてまだ負けているが、最近3本中一本は取れるようになっていく。

これが才能の力かどうか分からないが、剣に関しては他の追隨を許さないほどの才能だと……いいなあ。

まあ、一本取れるようになってようやく才能が有るって凄いことだと改めて自覚したよ。

1を学べば2を10を学べば20を……そういう感覚ですいすい身に付けられる。

弓や料理に関してもそうだが、槍も日本号で持ち主の動きをコピーしてどんどん吸収している。

前世では味わえない快感だ。だが、才能があるから強いわけじゃないというのもまた理解しているつもりだ。

なので、努力だけは忘れないよう日々鍛錬している。

……前世でもあまり努力をしないで日々怠惰に過ごしていたから社会人直前で、あの時も……という気持ちが大きくなったのだ。

だから一日一日を大切に過ごしている。

「そこ！」

恭也兄の容赦ない切り込みが襲い掛かる。
だが、恭也兄が切り込んだ隙はわざと作った隙だ。アーチャーのよ
うに自然とまでは行かないが
結構な割合で引っ掛かってくれるので重宝している。何より技量や
リーチ差を埋めるには危険だが
これ以外方法が思いつかないのが原因だが。

当然の如くその斬撃を防ぎ、刃を滑らせるようにカウンター。

一瞬で反応する恭也兄。あと一步のところまで防がれて距離を置かれ
る。

……最近、恭也兄が妙に慎重になってきた。まだ俺の事を甘く見て
いる節があるが、

一本取ってからは絶対本気で模擬戦やってるよ。あの人。

「ふっ」

一息で距離を詰め連撃、1年前から基礎を抜け出し御神流に合う歩
法や自分のスタイルを見付けている最中だ。

まあ、カウンター型かなとは思っているのだが・・・色々試してい
るがカウンター型が一番恭也兄との試合で勝率がある。

それにしても、小さな隙を狙ってこちらから攻撃しているのだが・・・
・全然当たってくれないなあ。

右に左にフェイントに……これでもかと責め立てるのに大きな隙
が中々出来ない。

やはり、慎重になっているな……ならば……「神速」を使うべきかな
……クククク……まだ実戦投入できるか分かんが。

恭也兄の小太刀を剣の丘に突き立てているので、その小太刀から経験を引き出して使っていたのだ。

ま、模擬戦でそんな事する必要もないしな。

それに、恭也兄の小太刀から経験を引き出さないと自信を持って「神速」が出来ない程度では、この先が思いやられるしな。

なので現在は学校から帰ったら即、道場に行き恭也兄の小太刀から経験を引き出して自主鍛錬している。

今の進捗状況は「神速」は実用レベルまであともう少しなのだろう、他の技に関しては実用レベルといった具合だ。

1年かそこら毎日動きを模倣しても中々形にならない。恭也兄の小太刀を使えば使用可能なのだが・・・

自分一人の実力となると完全な「神速」何てまだ完璧な習得は出来ないな。うん。

まあ、このまま毎日鍛錬を積んで、日々精進あるのみだな。

……まあお気づきかと思うが、模倣し始めて暫くたってから一本取れるようになったんだよ。うん。

別に最初言ってたすいすい実力が上がる事は見栄を張ったわけじゃないんだからね！勘違いしないでよね！

「せい！」

おっと…危ない危ない一本取られるところだった。直感が警報鳴らしてたから対応出来たけど。

まあ、今日は長引かせて少しでも経験値を稼ぐか。

「「「ありがとうございます!」」」

朝練が終わり（このか姉は早朝ランニング参加後家に戻って寛いでいる）シャワーを浴びる
汗を流してリビングに行くと、もう朝ごはんが用意されている。素晴らしい事だ。

今日の朝御飯は典型的な日本の朝食。ご飯、味噌汁、焼き魚。後は個々に納豆やら、野菜サラダやら
自分で用意して食べている。勿論、俺は納豆派だ。中でもひき割り納豆は俺の中で最高の美味さを誇っている。
毎日食べても、全然空気が来ないし付け合わせのタレとか、美味すぎる。

納豆をご飯にかけて食べていると、ふと視線を感じた。……恭也兄だ。

「どしたの?」

俺は恭也兄の方を向いて問いかける。
そんなに俺の納豆が食いたいのか?だがこいつが欲しけりゃ俺を倒してからにしろ。

「いや…本当に才能が有るなと思ってな」

「…御神の事？」

「ああ」

まあ、チートだしな。自分にどんな才能があるのか分かっている。

何て普通は有りえないしな。

何処か空しいけど、前世では何の取り柄も無かった自分が、もう動きだけならば2流を卒業しそうだしな。

恭也兄にとっては認めたくない部分もあるのだろうな。

「俺も色々な人の成長を見てきたが、なのはの成長は常軌を逸している」

「……そんなに？」

「うんうん」

「ああ」

……何だろう、嬉しさより空しさの方が勝っているなあ

カミサマから貰ったからです（笑）と言えれば自分の気持ちは楽になるんだけどな……

でも、無いよりあった方がいいからなあ。難しいなあ……。

「ホント、羨ましいよ……」

恭也兄がそんな事を言ったような気がしたが、考え事をしている俺には全く聞こえなかった。

社会の時間で自分の将来の事を考える授業とフェレットの夢でやはりというか、何というか…うん。原作と同じで不気味だ。そしてその日の帰りでの極め付けが…

「こつちの道が近道よ」

これだ。

下校途中、早く塾に行くためにアリサが鬱蒼と生い茂る林の中の道を指差して言う。

昼間なら全然オツケーだが、夜になるとこの道は怖い。絶対何かでるよ。

…いや、既に出てたんだな、思念体とか…幽霊とどう違うんだろ？何にせよ原作軸に乗っている俺であった。

「……………」

ふと、このか姉を見ると感慨深く…懐かしそうに…いや、俺じゃこのか姉の気持ちは分からない。きつと胸中では様々な思いが渦巻いているのだろつ。これからどう

なるやら…せめて、皆が無事ならいいなあ。

最高の方向は原作と同じ状況を作る事だが…どうなるんだろうな。
このか姉にレイ八さん持たせたら無双しか思いつかん。

ほら、いくわよ。の一言で俺達四人は長い長い道に足を踏み入れた。

原作ではこのか姉…まあ「なのは」がここで客観的に見たら電波な
行動を起こしたわけだが…

勿論俺はそんな事はしない。…原作に関わる気は満々だが。実戦経
験は絶対に経験しておかねばならない。

というより、このか姉はどう考えてもおかしいよ。9歳児があんな
化け物の目の前で、ふええええ！何て、自分の変身後の姿を見て叫
ぶ余裕があるのか？

…いや、無いだろ。常識的に考えて。まあ、そうしないと「物語」
が進まないんだけどな。

改めて思うと、9歳児から既に魔王としての肝っ玉は有ったんだな。
恐ろしや恐ろしや〜

「何自分の姉を拜んでんのよ」

「何してるのなのはちゃん？」

無意識のうちに拜んでいたらしい。いや、拜むだろう。
なんたって魔王兼俺の姉だ。拜まない方が可笑しい。

「ああ…このか姉万歳と思ってね」

「にゃ！と、突然どうしたの〜？」

わたたと手を振るこのか姉。どう考えても魔王というよりか弱い美少女だ：幼女か？
まあ何にせよ、自分の姉という所は変わらないのだからうがな。

そういえば、フェレット見つけなくてもいいのか？と思っているだろうが安心してくれ。

どう考えてもこの道の先にいるのは確定的で明らか。なんたって道が一本しか無い。

原作では確か道の真ん中で伸びてたはずだ。：まあこのか姉は早く助けたいのかも知れんが。

そう、思ってたら道の真ん中に何かいる。……フェレットだ。

「このか！？」

「このかちゃん！？」

このか姉が走り出した。：まだ数百メートルあるのだがサーチャーでも飛ばしてたのか？

いてもたってもいられなかったのか、何にせよ魔王の誕生か……フェイトガンガレ。

このか姉を追いかけて走ってみれば、そこには結構な血が付いているフェレット：ユーノがいた。

「ひどい怪我…早く病院に運ばなきゃ」

「もしもし鮫島？今動物が怪我してるのを見つけたんだけど、近くの動物病院は何処にあるの？」

こいつらは果たして小学生なのか？うるたえもせず対応してるし。

「わたし近くの動物病院知ってるよ！」

「でかしたわ！このか！」

さすががユーノを抱きかかえて、4人でダッシュで動物病院へ向かった。

「酷い怪我だけど、命にかかわる程では無いわ。安心して、もう大丈夫よ」

「」「」「ありがとうございます！」「」「」

動物病院へ行き診察してもらい、どうやら大丈夫だったようだ。今はぐっすり眠っている。しかし見れば見るほど愛くるしい姿だ。こいつ…抱きしめたくなる。こいつが淫獣だなんて…あれ？そう思うと可愛くなくなってきたぞ。

「あ、起きた」

アリサの一言で全員目がユーノに向けられる。

弱弱しく頭を上げて周りを見渡す。辺りを見回してやがて視線が止まった。丁度俺の所で……
そして、俺はおずおずと手を差し伸べる。ユーノが俺の手を舐めようとした時……

ひよい

手を引っ込めてみた。

とき

避けられたせいか、力尽きたせいか、その場でぐったりして動けなくなつた。

「……………何、やってるのかな？」

隣を見るとこのか姉が何かちよっぴり怒ってる。
アリサもすずかも何だか呆れ顔だ。……………ちよっとした出来心だつたんだよ。

……………

「……………ね、寝ちやつたみたいだし、塾行こうか！」

空気に耐えられず俺は塾の話題を出し何とか抜け出そうとする。

「…そうね」

俺の予想だと「あ、いつけなーい！もうそんな時間だわ！」と来るはずだったんだが…まあ現実なんてこんなもんさ。

ふふふ…もつと空気読むように努力しないと…ふふふ…
くっそ…夕日が目にしみて、涙がでるぜ。

「ただいま」

あの後、どうにか空気を戻して真つすぐ家へ帰ってきた。
例の3人は塾があるから途中で別れたのだ。
この時間帯は家には誰もいない。そんな時は堂々と魔術の練習ができるから毎日早めに帰ってきている。

ちなみに、はやてとは知り合っていない。すずかはまだ知り合っただのか分からないけど
俺がどうこうできるレベルじゃないからだ。闇の書然り、猫姉妹然り。

好奇心で接点を持って闇の書事件の前に猫姉妹の手によって舞台から退場何ていう未来は頂けない。

相手の実力が未知数だしな……まあ、最低でもフェイト以上。

そのフェイトの実力も分からない。俺自身の実力も何処まで通じるか分からない。

こんな状態で会っても、どう考えてもいい方向に転がるというのは考えられない。

しかし、罪悪感はある。何か方法は有るのではないかと考えているが…

どの手も悪手になりそうで怖い。それに、いきなりの実戦はそれも人型と戦えるかと言われたら

難しいとしか答えられない。これらを踏まえてはやてには会わないことにしている。

…酷いかもしれないが、俺だって自分の身が可愛いのだ。

それに、もう…死にたくない。だったら、原作関係無しで引きこもってればいいと思うが

ヴォルケンリッターに嗅ぎ付けられれば人生オワタだ。この魔術が闇の書に使用されたらどうなるか分からないし。だったら死なないうよう、鍛えないといけないのだ。

何にせよ、実力を高めなければいけないのだ。

この時間帯は投影を中心に鍛錬している。恭也兄の経験を引き出しまくって早く完全な「神速」を習得しよう

必死なのだ。千里眼では未来を見れば神速はあまり関係ないかもしれないが、未来を見ると非常に疲れる。

「神速」は凄まじい集中力で時間を引き延ばしているように感じるのだ。

疲れるかもしれないが、未来を見た時のリスクを負うより、「神速」でのリスクの方が軽いと思う。

そして何より…「神速」使いながらソニックムーブを使用すれば、

一瞬の移動の間に切れるというロマンが！
…あれ？千里眼だけでも行けるんじゃないか？まあ、いいか。無いより有るにこしたことはない。

やばい…是が非でも欲しくなった。俺は美由紀姉が帰ってくるまで鍛錬に打ち込んだ。

深夜。

扉が開いて直ぐしまる音がする。

そう、このか姉が駆けて行ったのだ。………始まるんだ…これから…始まるんだ。

俺もちょっと間を置き、起きて準備をする、そして階段を下りる。結局、いつ事件が始まるのか、どんな事件なのか

このか姉の口から出る事は無かった。このか姉が何を思っているのか分からない。
けど、いつか話してくれる。そう信じている。だから出来る事をやるんだ。

玄関を潜り、靴の踵を直し駆けだす。ふと空を見上げたら、満天の星空が優しく輝いていた。

原作（後書き）

誤字脱字等御座いましたら、ご指摘をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9022o/>

二人はリリカル

2011年8月4日21時13分発行